
CoolGum クールガム

りき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CoolGum クールガム

【Nコード】

N6797C

【作者名】

りき

【あらすじ】

ゲームとアニメが大好きな高校生、雪広。ある日、父の知り合いの子供という理由で、同じ屋根の下同居することになった少女二人と雪広。何かがおかしいと感じていた雪広に、姉妹だと名乗っていたその二人が本当の『目的』を告げる。あまりに突拍子もない話に、信じる事もままならないと思う雪広だが、隣に住む幼馴染の二カ子をも巻き込んで、その奇怪な『目的』に付き合わされることになる。未来へと繋がるこの時代で、雪広達がぶつかる事件。その真相、その理由とは？姉妹と名乗るその少女達の正体は？オタクだって頑張

ります。オタクだって戦います。オタクだからこそ、輝きます！現代オタクファンタジー！

第一話

晴れた空。浮かぶ雲。澄んだ空気。暖かな太陽。

梅雨前の、気持ちのいい日曜日。何かしないともったいないと思わせるような、そんな日。

俺は、窓から見える住宅街をゆったりと見ていた。一軒家の二階にある自分の部屋からは、近所の家の屋根ばかりが見えるが、その上に広がる眩しい大空は目を潰すほどだ。

「絶好の行楽日和、だな、ホントに」

昨日のテレビで見た天気予報のお姉さんが、やけに自信ありげにそう言っていたのを思い出す。まさにその通りになったようだ。

窓枠にもたれかかって、思いつき伸びをする。

伸びつてなんでこんなに気持ちがいいんだろ、と答えの出なさそうな疑問を頭で考えながら、もう一度空を見上げる。

こんな日は気分がいい。やるか。

注ぎ込まれる日光を惜しむ素振りとは全く見せずに、あっさり窓を閉め、カーテンも閉める。部屋のドアの鍵も閉めておこう。突然親に入って来られたりしたら、興ざめする。

臉に残る太陽の残像が薄れていくと、次第に見慣れた部屋の風景がはつきりしてくる。

真っ暗になった部屋には、パソコンのディスプレイと、テレビの画面の明かりだけが浮かび上がる。六畳のこの部屋には、意外にそれだけでも不便さを感じないものだ。

部屋の鍵を閉めてから、布団を踏んづけて部屋の奥にある座布団に向かう。床にひいたその座布団は潰れきっていて、なんだか一年中湿っぽいし、長時間座していると尻が痛くなるけれど、なぜだろう、捨てる気にも、取り替える気にもならない。愛着があるというほど可愛いものではないが、言うなら、俺の癒しアイテムの一つなんだろ。その座布団を囲むように、パソコンとテレビが直角に置

いてある。二つの画面から放たれる明かりの交わる場所、そこが俺の低位置だ。その中であぐらをかいて座り込む。

まず、パソコンのデスクトップにあるアイコンをクリック。ウィンドウが開くまでの間に、テレビの下に閉まってある弁当箱大の箱を取り出して、開ける。ケースからディスクを取り出して、テレビに繋がるDVDプレイヤーに入れる。DVDが読み込まれる間に、またパソコンのディスプレイに向き直り、表示されたログイン画面が現れる。いつも通りの手順でパスワードを入れて、エンター。

テレビからはお気に入りのアニメの主題歌が流れ始め、パソコンには今やり込んでいるネットゲームの世界が広がっている。

趣味？ アニメ見ることと、ゲームすること。

学校？ この辺ではそこそこの頭いいって有名な学校に在学中。今年生。

オタク？ 世間から言わせればそうなのかな。

もし俺がオタクと呼ばれる人間でなかったら、この一連の出来事はきつと存在しなかったのだろうか。

第二話

色んなオタクっていうのがあるけれど、俺はアニオタ、ゲーオタっていうのに該当すると思う。アニメとゲームが特に好きって事だ。休みの日は大抵、アニメのDVDボックスを片っ端から見たり、ネットゲームに入って、そこで出会った仲間とチャットで話したり冒険をしたりする。

部屋に太陽の明かりが入ると、画面に反射して見難くなるので、昼間からカーテンは締め切りにする。そのせいもあって、時間の経過を知る手段が時計しかなく、あつと言う間に何時間も過ぎていたりして、自分でも驚くことがある。気がつくと、目や肩が痛かったりするが、夢中になっているとそんなことは気にならないものだ。これぞオタクパワー！

いくらあつても休みの時間は足りない。時間がないわけではない。学生だから融通の利く時間は結構あるけれど、夢中になっている時間っていうのは、光速で過ぎていくように感じるもの。その日も、夕飯の準備が出来た、と母親に言われて、自分が今日何も食べていなかったことに気づかされた。急にぐーと腹がなったりして、人間の体も案外、気の持ちようってトコに左右されるものなのかと感じる。

階段を降りて、食卓に着くと今日のメニューはコロッケだった。自分の頭の上に音符マークが浮かぶ、そんな気分。コロッケは好物だ。

しかし、母はそんなコロッケに、『愚痴』という不味そうなおソースをかけるのだ。

「あんたは、今日も一日中部屋の中に閉じ籠って。若い子が不健康で、お母さんイヤだよ」

親、とくに母親というものは、子供が産まれるか産まれないかの時には、ただ健康でさえいてくれればいい、とそこいら中の神様に

願うくせに、いざ健康に育ってみると、やれ勉強して少しでもいい学校に、やれ近所の体裁考えて身だしなみに気をつけて、だのと欲が出てくるのだ。

うちの母もその典型に漏れず、一般的な母親だ。息子を見れば、何かを言わずにいられない、という感じ。毎日のように同じことを言う。

十六歳の高校生が部屋に閉じこもって何時間も出て来ないんじゃない、心配するのは分かる。それが普通だと思っし、俺が親でも同じこと言うだろう。でも、可笑しなもので、親の言い分が正しいからといって素直に忠告に従うか、というと、残念。そううまくはいかないものだ、思春期の子供なんていうのは。言われている事が真つ当な程腹が立って、つい言い返してしまう。

「日曜くらい、好きなことさせてくれって、いつも言ってるだろう？　うるさいな、人が飯食ってる時に」

「そんな事言って、家に居たってご飯食べるときくらいしか顔見せないんだから、しょうがないじゃないの」

母親が正しい。そのとおりだ。部屋にいるのが好きすぎて、全然外に出なくなった。仰るとおりだ。分かっているのに、俺の口は悪い子だ。

「平日はちゃんと学校行ってやることやってるんだから、いいじゃないか。人の趣味はそれぞれだろ？　それにこんな事してられるのも、今のうちなんだからさ。がみがみ言うなよ」

「何言ってるの。このまま引き籠りとかになっちゃったらって、お母さんだってアンタのこと心配して言ってるのよ。だって、あんた、オタク趣味なんでしょ？」

「……んんごっ」

思わずむせる。

とうとう来たか。

そのうちこう言われるだろうな、とは予想していた。近頃テレビや雑誌で『オタク』と呼ばれる人達を取り上げては、その異常なま

での執着ぶりやら熱中ぶりやらを、半分興味と半分嘲笑の意味を込めて紹介している。オタク文化は世界に飛び火！なんて言っているが、日本ではまだ、マイナー文化から抜け出してさえない。それでも、マスコミからの注目が高いままなのは、その個性に世間が放っておけない魅力があるから、と言うことなのだろうか。

もちろん、それはうわさ話が大好きな母の目にも、耳にも届いており、明かされる『オタク』と呼ばれる人々の生態と、自分の息子との共通点にとうとう気づいたということだ。

メディアから得る情報を、所々掻い摘んで纏め上げた母の『オタク』関連の知識は、偏っていて間違っていることも多いのだろうが、自分の息子もどうやらそっちの世界にはまっているようだ、と感づいてしまったのだろう。

「お母さんね、暗い部屋の中で、テレビの明かりに浮かぶあなたの顔見たときは、正直、背筋がぞーっとしたわよ」

想像してみた。

「こわっ！」

自分のことながら、気持ちの悪い光景だ。

しかし、自分では、いたって普通の趣味の範囲であり、悪いことをしているでもないのに、『オタク』だからといって、色々言われるのは気分が悪いのである。

「とにかくさ。人の為になることをしてる、とは言わないけど、人様に迷惑をかけているわけでもないんだから、いちいち文句言わないでくれない？ ごちそうさま」

「こら、雪広。まだご飯残ってるでしょ！」

背中に母親の小言を受けながら、すくすく二階へ避難する。階段を登る俺の後ろで、母親は溜め息混じりにぼやく。

「はあ。いつからオタクなんかなったのかわからない、まったく」

親が嫌いなわけでも、話したくないわけでもない。でも今は、自分の世界を壊されたくない。

俺はここが好きなんだ。

パタン、と部屋のドアを閉めると、急に眠気が襲ってきた。さすがに十時間近くも、ゲームを続けていれば体は動かさずとも疲労はたまる。しかも空っぽだった胃に、半分は食べ損ねたとはいえ食事もしたから、なおさらのことだろう。

部屋の真ん中にしてある布団に倒れこむように寝そべる。何も見えてはいないが、暗い天井をぼーっと見つめながら、母の言葉を何となく繰り返していた。

いつから。

オタクと呼ばれるような趣味の世界にはまったのか。答えは意外に簡単で、「知らないうちに」だ。大抵のオタクはこう答えるんじゃないだろうか。

前に何かの雑誌で、自称オタク評論家みたいな人が言っていた。

「オタクを辞めるのは、簡単な事じゃない。でもオタクになろうと思っ、なる事もできない」

なろうと思った記憶もないし、何をもってオタクになれるのかは知らないけれど、好きなことをしていたら、自然に自覚するようになっていた。

でも、その兆候は小さな頃からあったのかもしれない、と思う。

もともと俺は、物語と言うものが好きだった。小さい頃に聞かされた、昔話やおとぎ話。もうちょっと大きくなってからは、戦隊モノのドラマだったり、日曜の朝やっているアニメなんかももちろん観てた。それは、多くの同年代の子供達と同様の行為だったけれど、俺は他の子達以上にその世界にのめり込んでいた。それに気づいたのは、幼稚園だったろうか。人気の変身ヒーローのポーズを、みんなはそれっぽくも適当に真似して満足していたが、俺は完璧に全ての振付けと、台詞を暗記していた。それをやってみせると、すごいすごいと誉められて気を良くしていた事を覚えている。その頃から好きなものに対するこだわりみたいなものが人一倍強かったのだと

思う。

隣に住んでいる石野二力子は、何をやらせても俺よりうまかった。お遊戯も、歌も、運動も。いちいち憎たらしい言い方でバカにされていたが、俺はもつともだ、と何も言い返せなかった。しかし、変身ポーズだけは、二力子も手を叩いて喜んだ。

「もう一度やってみせて。ユキちゃん、すごい」

俺が初めて二力子に誉められたのはその時で、とても嬉しかった記憶がある。そして俺は、初めて自信の持てる事ができたものだ。

俺は、どの物語の主人公にも憧れたし、どの話の舞台になる世界も、自分の目の前に広がるそれよりも魅力的に見えた。時には武士の時代だったりもしたし、時には数百年先の想像の中の世界であったりしたが、その度に今この時代に生まれた事を悔やむほど、心を奪われた。

だから、外の公園で遊ぶことよりも、家にいる方が好きになったし、一人で遊ぶ時間を好んだ。もしも、その時外で遊ぶことを強要されていたら、もしかしたら今の俺はいないかも知れない。しかし、残念ながら、いや、残念ではないけども、俺の母親はこう言った。

「やだ、この子ったら、将来文学の道に進むんじゃないかしら。あなた！　ちよつと、手当たり次第本を買ってきて頂戴！　はやく！」
外に出ることを強要するどころか、インドアを後押しされちゃった訳だ。

お陰さまで、色々な本やビデオを与えてもらった。百科事典に昆虫図鑑、世界の国旗一覧みたいな本やらもあって、両親があらさまに俺を天才少年に仕立て上げたいと目論んでいる様子が窺える。しかし、そんな親の野望を知らずとはいえ、俺はファンタジーやフィクションの世界にばかりのめり込んでいた。俺にとっては、小説は現実より奇なり、だったのだ。

物語の殆どは、その種類こそ違いはあれ、善と悪との戦いがテーマになっていると、俺は思う。ヒーローが悪人を懲らしめる、とい

う分かりやすいものもあるし、人の心の中の善悪の葛藤を描いている場合もある。そして、子供がめぐり会うチャンスのある物語のほぼ全ては、最終的に善が勝つことで気持ちよくハッピーエンドになるのだ。

ヒールが好きで、少し捻くれた考えを持っているませた子供は、バッドエンドの物語を「カッコイイ」と言うかも知れないが、物語の最後はスッキリ清しいほうがいい、という子供のほうが圧倒的に多いのだ。もちろん、俺もその一人だ。

決して自分にはなり得ない物語の主人公。勇気ある決断や、揺るがない信念。いざというときの運や、心から信じられる仲間達。

まるで、読んでいる本や観ているテレビの画面の中に、自分が飛込んでいくような錯覚を感じるほど夢中になった。

終わらないで。もっといさせて。

と、いつか「完」の文字が出てくることを、心の隅で不安に思うほど、どっぷりと浸かっていった。

思えば、あの頃から、俺は根本的に何も変わっていない。言いたくないけれど、成長していかないって言うことかも知れない。

現実の世界を拒否するつもりもないし、自分のおかれている環境も、すべきことも分かっているつもりだ。俺は高校生で、学校に通い勉強をする。学校は勉強をするだけのところではなく、協調性を身に着けるところでもあるのだから、友人をつくり交流をもつことも大切だ。なにより、高校生という、青春時代の大きな割合を占めるこの三年間に、沢山の思い出を作ること。

大抵の事は分かっているし、それが嫌だと言っている訳でもない。ただ、現実とは違う世界にトリップする感覚が好きなだけだ。夢中になれる世界が、現実世界ではなく、画面や紙面の「向こう側」にあるから、その物質に向かい合って身動きしていないように見えるけれど、本人はその「向こう側」で、主人公と一緒に笑って泣いての大冒険中なのだ。

そして今は、その世界へ行く媒体が、アニメやゲームになったと

いうだけ。だから、それらに夢中になっているだけ。

そんな俺をオタクと言うなら、構わない。好きにしてくれ、と思う。でも、そんな呼び名を付けたからと言って、俺は何も変わらないんだ。

第三話

眠い。頭の中の細胞が殆ど寝ている、いや、死んでいるんじゃないかと言っほど眠い。しかも、今日は月曜日。なおさらやる気も元気もでない。

体をひきずるようにして、階段を降りる。その最下段には、わざと嫌そうな顔でこちらを見ている母がいる。

「うわ。この子ったら、ひどい顔ねー。そんな顔じゃ彼女ができるのなんて、半世紀先かしらね」

昨日の夕飯を残して話を切り上げた事を根に持っているのか。母は、言ってやった、と言わんばかりのしたり顔で台所に消えていく。朝から嫌みを言ってくれる。言い返してやるうかと思っただ、今はそのパワーもまだ充電されていない。今回は不戦敗で結構だ。

ずるずると食卓に向かい、横向きに椅子に座る。背もたれの上に肘を寄せ、リビングの大きな窓の横にあるテレビを、ぼけっと見る。「ごはん」

顔をテレビに向けたままで、うわ言の样につぶやく。

母は聞こえているのかいないのか、返事はしないでそのまま忙しくしている。

テレビではなんとかっていう大臣の発言は不適切だ、なんていう揚げ足の取り合いみたいな事を、高給もらっている政治家の皆さんが、生き生きとカメラに向かって力説している。

「どーでもいいわ、こんな事……」

と、もさもさと言いながら見ている時だった。

「男なら朝でも、腹から声をださんでどうする！」

俺は飛び上がりそうになるほど驚いた。ネクタイを結びながら、まさに腹から出したような声で激を飛ばしてきた人影が、いつの間にか部屋の中に立っていた。

「びっくりしたー！」

驚きのあまりに、寝ぼけていた声帯が一気に全開になる。

「い、いつかえってきたんだよ、父さん！」

「昨日の夜だ。そんな遅くでもなかったんだが、お前はもう寝てたからな」

「……ああ、そっか、そっか」

父は普段は家を空けている事が多い。繊維を扱う商社に勤務していて、今はインドや中国の工場で現場監督のような仕事をしている。故に、長期間海外に滞在する事が多く、日本の家にいるのは、年でトータルしても数週間程度だ。そのくせ、不在中に家族が恋しかったり、心配になったりとかはしないのであるうか、一切連絡などもしてこない。帰国予定すら知らせないので、今日のような久々の対面がドツキりの様に執り行われるのだ。

「言ってやってくださいよ、あなた。もう、アニメだかゲームだかに夢中で、男らしい事はなんにもしないんですから」

納豆とご飯をテーブルに置きながら、母は愚痴る。

俺はちらっと母の顔を見てすぐ背ける。父は俺をまっすぐ見下ろしながら言う。

「お前、オタクになったんだって？」

なんだ、それ。

母がどんな事を父に吹き込んだのかはわからないが、湾曲した情報を流し込んだに違いない。否定するのも嫌になる。

「そんなんじゃないってば……」

「おい、お前オタクなんだろう？」

父の大きすぎる声につい顔をあげる。

「それどういう意味？　っていうかさ、久しぶりに帰ってきて早々、息子に言う言葉が、おまえはオタクか、なの？」

父はほんの瞬間、眉間に力が入ったように見えた。が、すぐに表情を和らげ続けた。

「ああ、まあそうだよな、すまん、すまん。朝からお小言じゃ気分も悪い。母さんが心配してたから、ついな。うん、そうだよな。」

で、どうなんだ？ 違うのか？」

俺はあからさまに怪訝な顔を父に向けた。気持ちが悪い。父が俺に謝る事もそうだが、オタクかどうかを、こつも真顔で詰問されるなんて、おかしくないか？

「ちがうつて言ってるだろ、まったく。なんなんだよ、俺がオタクだとなんか問題があるのかよ」

父はこれまた大げさに、顔の前で右手を左右に振りながら言う。

「いやいやいや、問題なんかある訳ないじゃないか。おつと、母さん、もう出る時間だから、朝ご飯いらないよ」

そう言つと、なんだかぎくしゃくしながら父は玄関に向かっていった。

今日は遠方から大切なお客様がくるから、接待で遅くなりそうだと母に話しているのが遠くで聞こえる。

俺は様子のおかしい父を不思議に思いながら、廊下の方を目で追いかけた。半年、いやもう一年ぶりくらいになるだろうか、久しぶりの父は少し疲れが溜まっているように見えた。以前の印象より、痩けた気がする。普段、一人でどんな生活をして、どんな毎日を送っているのかはわからないが、帰国しても家で休まる事のない父の様子を見ると、楽なものではないのだろうという事くらいは察がつく。

大体にして、完全専業主婦の母は家事以外の仕事はしていない。父の給料だけで、この家計は守られているのだから、感謝しなければならぬのかも知れない。まあ、考えてみれば、一家の当主が仕事をし、そのお金で女子供が食べていく、という至極普通な家庭のあり方か。父があまりに家にいないので、お金だけもらっているような、変にありがたいというか、申し訳ない気持ちになるのはなぜだろう。

と、今俺が気にしなければならないのは、自らの置かれた家庭環境の凡庸さなどではない事を教えてくれたのは、母だった。

「あんた、ぼけっと考え事してるけど、まだ出なくていいの？」

はつと今日初めて時計を見る。

「うおお。こんな時間っ！」

そして、いつもとは少し違う迎え方をした朝に、既に滅入った気持ちで家を出た。

俺の通う高校は公立で、自分の学力に見合っているという理由と、何より自宅から近いという理由で入学を決めた学校だ。どのくらい近いかというと、徒歩で行ける。しかもたったの十分。玄関から校門まで、いわゆるドア・トゥー・ドアってやつで、だ。

満員電車というものが苦手な俺にとって、この条件は強力な魅力だった。中学の進路相談の際も、この高校に入る以外考えていない、と言い通して、もしも落ちたらどうするつもりだ、と心配する担任をも説き伏せた程だ。

念願の学校に無事入学したのが二ヶ月前の四月。それからは、お陰さまで遅刻もなく通って来たのに、父の登場によって、その皆勤記録がまさに今危ぶまれている。

三年間無遅刻無欠勤を貫く覚悟も気力もさらさらないが、遅刻して行くくらいなら休んだ方がましだ。ただそれだけのことなのだ。とにかくそんな事をつつすら考えながら、足を前に前にと進めていく。

この辺の住宅街は、古い家が多いが土地も広く分譲されており、そこそこ見栄えのいい建物が多い。商店街も近いので閑静な、とは言い難いがとても和やかな雰囲気の町並みだ。

しかし、そんな快適な通学環境も、遅刻するかも知れないということ。こんな朝には地獄のマラソンロードと化す。徒歩では十分だが、早歩きなら七分、走れば五分。普段からぎりぎりの時間に家を出る癖がついているのにも関わらず今日は五分も遅れている。俺はぶつぶつ文句を呟きながら、歩き慣れた通学路を小走りしていた。

ちよっと行っただけで、俺の学校のセーラー服を着た女子が、同じように小走りしているのが見えてきた。見覚えのある後ろ姿。

後ろに高く束ねた髪が揺れる。日焼けした足は部活でやっているクロスのせいだろう、左手にはそのラケットも持っている。

石野二力子だ。

すぐにわかった。小学校にあがったくらいから、隣に住んでいて同じ年ではないながらも殆ど話す事はなくなった。二力子はいつもクラスの中でも人気者のグループにいた。それは中学に入っても変わらず、既に色んな意味で地味だった俺とは関わる事すらなくなった。当然、彼女が自ら俺と幼なじみである事を明るみにする必要もなく、いや、はっきり言えば、誰にも知られたくないというのが本音か、その事実には隠されたままだった。

中学を卒業したらお別れだろうと思っていたが、遊んではっきりに見えた二力子は実は勉強もでき、同じ高校に入学が決まったと、親伝いに知った時は驚きもしたが、さすがだな、とも思ったものだ。しかも入学してみたら、同じクラスにいた。お互い意識していた訳ではないので、クラスではったり会ったときには、おっ、と声が出てしまった。その時、よろしく、と挨拶して以来、会話をした事もない。華々しい高校生活を送る二力子に、オタクの幼なじみは、迷惑な存在に違いない。しかも同じクラスとは、さぞかしがっかりしただろう。俺も立場はわかってるつもりだ。

爽やかな風貌と、明るい性格。高校入学後、どこから俺の存在を知ったのか、見知らぬクラスの男子から、突然二力子の事を根掘り葉掘り気かれた事も何度もあった。顔の人気も上々らしい。

そんな二力子は、携帯で誰かと話しながら、軽い足取りで小走りに進んでいる。

この分なら、俺も間に合いそうだな、と負けずに急いだ。

進行方向にしか意識を向けていなかった俺のすぐ後ろに、誰かが近づいている気配に気づいた。

聞こえる足音は離れる事もなく明瞭に聞こえている。もう自分を抜いて行くだろうと思っただけでも、なかなかその姿は視界に入っ

こない。

誰にでも経験があるのではないだろうか。町を歩いていて、後ろに誰かの近づく気配がしても、ストーカー被害に苦しむ年頃の女性でもない限り、そうそうすぐに振り返ったりはしない。しかし、ちゃんと音と気配でその距離を計っていたりするものだ。そろそろ抜かれるな、とか、今の角を曲がったのかなとか。それくらい、人間は後ろから迫るものには、五感を駆使して状況をつかもうとしている。目に見えない不安感がそうさせるのだろうか、とても野性的な感覚のような気がする。

だが俺は気づいた。普段とは違う不自然な、わざと自分の後ろについて歩くその気配。俺は足を止める事なく、後ろに首を向けて何者かを確認しようとした。

「おはよう」

不意にかけられた声に面食らう。驚きつつその発信源を探すと、振り向かれるのを待っていたかのように、にっこり笑いかけてきた。おもわず返事。

「お、おはよう、ございます」

小柄な、中学生、いや小学生かもしれないと言っくらいの年頃の女の子。腰まででありそうな明るい茶色の髪をこめかみの上、高いところで二つに結び、キラキラとした目でこちらを見ていた。まるで何かのキャラクターのようで、かわいらしい子だと思った。

見た目からすれば確実に年下であるうが、その臆さない態度と落ち着きに、つい敬語で話してしまう。

「あ、あのー、急いでいるんですけど、何かご用ですか？」

学校の門はもう二、三分のところにあつた。なんとか間に合いそうだけに、俺は足だけは止めずにいた。少女にとっては駆け足のスピードなのにも関わらず、離れずに話を続けて来た。

「今日から、よろしく！」

ようやく歩く速度を落とし、不思議な事を言い出す少女をよく見た。変わらずニコニコとこちらに笑顔を見せているが、作り笑顔の

ように見える。

見た事のない顔だと思う。真っ黒で大きな目がとても印象的。肌の白さは色素自体が薄いのだろう、透き通るようだが、病的なものではなく、顔立ちも含め外国の血を引いているのだろうかと思わせる。こんな日本人離れた容姿なら、そう簡単に忘れるはずもないだろう、初対面だ。なのに、今日からよろしく？ ってなんだ。意味不明すぎる。

しかしすぐさま、その訳に見当をつけ、なるほどと納得した。

「あのですねー、悪いけど人違いだと思いますよ。えっとちよっと今時間ないんで、先行きますね」

軽くだが頭まで下げて、俺はもう目の前に来ている校門に向かつて最後の加速をした。その少女は、それ以上は追いかけてはこなかった。

下駄箱に到着したところで予鈴がなった。もう辺りに人影もまばらで、皆教室に入っているようだ。

とにかく遅刻は免れた。なんだか朝からバタバタしていたせいで疲れてしまった。一時間目の始まるまでの五分間は脱力していたい気分だ。

はああ、と肩を落として下駄箱から続く廊下を、だらだらと自分の教室まで歩いた。

「うーっす、ユキ。なんだよ、遅刻でもするんじゃないかと思ったぜ、どうした、寝坊か？」

教室の後ろのドアから入って来た俺に気づいて、机について携帯をいじっていた草哉そうやが寄って来た。

「なんか色々朝からあってさ、俺も焦った」

「遅刻なんかするくらいなら、休んだほうがいいもんな。クラスの注目を浴びて登場するなんて、死んでも嫌だ」

俺の肩にポンと片手を置いて、そうだろ？ という顔で席に戻って行った。さすが、一番の俺の友、考える事が一緒だ。

クラスの中では、できるだけ目立たないようにしていたい。ただでさえ、オタクへの風当たりはこの年代、特に厳しいのはわかっている。何をしても、きもーい、だ。だから前に出ず、迷惑もかけず、小石のような存在でいたい。存在を極限まで消していたいのだ。

その気持ちを理解し、同感してくれるのが草哉だ。なぜなら、彼も同じ側の人間だから。彼はアニオタの部類に入るが、完全に美少女キャラ萌えだ。どちらかというヒーロー物が好きな俺とは、お互いジャンルは違うという意識はあるのだが、周りから見ればいっしょくただろう。とはいえ、草哉とは色々趣味の話ができるので、学校では貴重な友人だ。一人でも理解者がいるのは心強いのだ。「そうだ、ユキ。この前言ってた話。どう？ 興味あるだろ？ 今週の日曜にまたオフ会あるからさ、お前もそこに来いって。絶対ハまるから！」

草哉は最近行き始めた、ネットで知り合った人達と実際に顔を会わせる為の会、いわゆる『オフ会』と呼ばれるものに俺を誘うようになった。

「あ、ああ。うーん、考えておく。今週の日曜ね」

「おいしい、頼むよ、来てくれよ。来てくれないと、ヤバいんだって、俺」

「ヤバいって何がだよ」

俺の返事に少し苛立った様子だった草哉は、気まずそうにしている。

中学が一緒だったこともあり、付き合いはそこそこ長いが、この所、草哉がこの話をする時だけ、少し違和感を持たされる。いつもの草哉は、人は人、自分は自分と、干渉するのもしられるのも嫌うあっさりしたタイプだ。なのに、このオフ会の事になると、面倒だから、と何度が断ったが、なぜかくどい。いつもなら、あっそ、で終わりそうなものを、なんで来ないのか、いつなら来れるのか、いいから来い、と粘着質だ。どんな会なのか、と聞くと、とにかくとても楽しく、一度参加すればわかる、と言うのだが。

「いや……まあ、とにかくさ！ 出来るだけ、来てくれよな！ あ、ガム食う？」

「いらねーって。俺ガム嫌いだって言ってるだろう」

「あ、そっか。そだったな」

これから授業だというのに、最近いつも食べているお気に入りのお菓子を食べている。

まだ今日は月曜だ。気が向いたら一度位は付き合っただけでいい。

あの草哉があれだけ言うのも、それだけ楽しい集まりだからなのだろう。席に戻った友人の背中から視線を外し、自分の席へと向かった。

席につかず、好きなように集まっておしゃべりをしている生徒でざわつく教室に、始業の合図が鳴り響いた。間を置かず、担任でもあり、一時間目の英語の教師でもある石川先生が入ってきた。若い女の先生で、美人と言う訳ではないが、海外経験が長かったせいかサバサバしていて、男女共から人気のある先生だ。英語自体も嫌いではないので退屈な授業ではないが、今日ばかりは身が入らない。

俺の席は、一番窓側ではあるが、前から二番目。しかしこのあたりというのは、なかなか先生達の注意が向けられる事が少ない場所だったりする。授業中、ランダムに当てられる事も、ことのほか少ないと思う。ゲームのし過ぎで眠い朝一も、ぼけっとした放題なので、気に入っている。

耳に英語を慣れさせるという理由で授業の最初は、先生が今日のニュースを簡単に英語で話してくれる。もちろん全てを理解できるほどの英語力はないから、なんとなく聞いているだけなのだが、どうやら出てくる人名からすると、今朝テレビで見た政治家の話らしかった。

くだらね、と心で呟きながら、ばれないように窓から校庭を眺める。朝一から体育をさせられているかわいそうなクラスが、走り高

飛びの用意をしていた。

さっきの女の子、そういえばなんだったんだろう。

ふと先ほどの少女の言っていた言葉を思い出した。

普通、黙って人の後を追いかけてくるか？　まずは声をかけるなり、顔を確認するなりしてから近づかないか？

それに、「今日から、よろしくね」だ。俺と間違うくらいだから、彼女よりは年上であろう相手に、馴れ馴れしい口ぶりでもある。

この台詞をいう場面を自分なりに想像してみる。

上から物を言える立場だけど、実際は下の者に頼らざるを得ないような時。例えば、新任のキャリア上司は現場の経験はないけれど、課長に抜擢されちゃって、平社員に色々教えてもらわなければならぬ、なんて時。

「えー。本社からこの営業一課に配属されてきた山田です。今までずっと本部でやってきましたが、今日からここの課長として、みんなとやっていく事になりました。わからない事も多いと思いますが、今日から、よろしく」

俺は営業課の平社員かつつの。ノルマに追われて痩せこけていく悩める中間管理職かつつの。

まあ、それはおいといて、だ。「今日から、よろしく」は、そんな感じで使われるはずの台詞だ。あの少女が俺に言う言葉としては間違っている。いや、俺は人違いなんだけど。それにしたって状況を想像しにくい。

どうでもいいか、そんなこと。

気になる事は多いが、もう会う事もないだろうから、答えを知る事もできないだろう。所詮、赤の他人だ。

考えたって仕方のない事だ、と思考に終止符をうつて、ぼんやり見ていた校庭から目を離そうとしたその時。視界の隅に、何かがちらつと見えた。

走り高跳びの生徒達のその向こう側、さっき俺が飛び込んできた校門の前に、人影。生徒や教師らしき人なら気に留まる事はない。

何か予感がして、もう一度目を凝らして探す。

「おい……」

つい、声を出して言ってしまった。

そう、まさに今思い出していたあの少女が、この学校の校門をくぐり中に入ってきたところだった。しかも、一人ではない。隣にはこの学校のものではない制服を着た、見たところ高校生らしい女子が一緒だ。二人は肩を並べて、玄関となる下駄箱のほうへ歩いて来ているではないか。

「Mr. Tanaka. Are you listening?
Hey. What's wrong? Mr. Yukihiro
Tanaka? ちょっと、田中君、どこ見てるの?」

急に耳に入ってきた先生の声に、思わず飛び上がった。俺はすぐ真横で大きな声を上げられるまで、全く気づかなかった。

クラス中の視線がこちらに向けられている事態に、一気に顔が赤くなつていくのがわかる。赤くなるな、恥ずかしいから赤くなるな、と思えば思うほど耳まで燃え上がる始末。

「授業に集中できない程、外の体育が気になるの?」

クスクスと、周りからは失笑の声が聞こえる。

「す、すいません、ちよつとばーつとして……」

石川先生は、教科書で俺の頭を軽く叩いて教壇にもどった。

顔の血が引いていく。酸欠状態になりそうなほど緊張していたようだ。頭をうなだれながらこっさり草哉の方を振り返ると、口に手を当てて笑いをこらえている振りをしている。

軽く草哉を睨みつけてから、静かに椅子に座り直し、落ち着きを戻そうとする。

いや、ちよつと待て。落ち着いてられるか。俺が見たのはなんだつたんだ? 校庭にいた姿は、俺の幻覚か?

教科書を読んでいるような格好で、さっき目にした事をよく思い出そうとしてみた。

朝声をかけられた時は急いでいたし、歩きながらだったから何を

着ていたかなんて言うのは覚えてないが、あの明るく長い髪。あれは間違いはないはずだ。俺の上司、いや、さっきの少女だ。

なんでこの学校に入って来たんだ？ しかも、もう一人いたあれは誰だ。姉ちゃんか。姉ちゃんっぽいな。ああ、転校生とか？ あり得る。どこかの制服着てたしな。でも、普通転校するのに、妹連れてくるか？ だいたいにして、今日は月曜でしよう？ 学校はどうしたよ、妹。小学校でも中学校でも、あるだろう、今日は。

ぐるぐると頭の中で考えが巡る。もう二人は校舎に入ってきているかも知れない。転校生なら、まず行くのは職員室とか、校長室とかだろう。見に行きたいが、まだ始まって間もない一時間目が終わるのは遙か後だ。

ああああ、歯がゆい。

と、つい机を手のひらでバンと叩いてしまった事に、気づく。恐る恐る顔を上げると、もちろん、教壇の先生はこつちを睨んでいた。「田中君、授業に集中できないなら……」

コンコン。

先生の怒声があがり始めたその時に、教室のドアを叩く音がした。ドアを細く開け、顔を覗かせたのは教頭だ。全校集会などでしか顔を見る事はない人物だが、つい最近の入学式で紹介されていたから覚えている。石川先生はそのまま廊下に出て教頭と話している。

お陰さまで俺に注がれていた視線の全てが、教室前方のドアに一斉に移ってくれた。それも当然か。普段、授業中の教室に訪問者がくるなどあり得ない。授業を中断する行為なだけに、何事かと思う。例えば誰かの家族が事故にあったとか、学校に爆発物が隠されているという情報がいったとか。教室内は、にわかに沸き立った。

しかし、事実そんなものではない展開だった。

ほどなくして石川先生は教室に戻って言った。

「皆さん、ちょっと聞いてください。急な話なんです、本日このクラスに転校生がくる事になりました」

途端、どよめきと感嘆の声があがり一気にざわつき始めた。

石川先生は、予測していた通りの反応だったのか、はいはい、と言いながら手を三回程叩いて、鎮静を計った。

「本当は明日からの予定だったんですが、本人が一日も早い転入を希望しているという事で、校長先生のお許しもでて、急遽本日よりと言う事になりました。まあ、授業の途中ではありますが、担任の私の判断で、今から紹介したいと思います。いいですね」

それを聞いた生徒達は、突然の転校生の登場に驚きと好奇心の声を上げた。

そんな中、体の至る所から変な汗が吹き出す感触を味わってたのは俺だけだろう。信じられないと思いつつも、どんな転校生なのか、もう見当はついていたらだ。

「どうぞ、入って」

先生が廊下に向かって声をかける。

そろそろとドアが横に細く開き、予想通りの人影が入って来た。

「じゃあ、簡単に自己紹介をお願いしようかしらね」

その子は、間違いなく、朝の少女の隣に歩いていた女の子だった。同学年と言う割には大人びて見えるその少女は、緊張するような素振りもなく、はっきりとした口調で話した。

すぎたまきお
「杉田真紀緒です。どうぞよろしく願います」

「杉田さんは、今までスイスで暮らしていましたが、ご両親のお仕事の関係で、日本に戻ってくる事になりました。海外生活が長かったので、まだこちらの生活に慣れていない事も多いと思います。みんな、色々教えてあげてね」

おおお、という歓声と、後ろの方では男子がこそそことかわいいだのなんだのと話している。かわいいと言うよりは、美人系と言うのではないだろうか。肩くらいまである黒髪をまっすぐに下ろし、長めの前髪を耳にかけて、制服さえ着ていなければOLさんみたいなしっかりした印象を受ける。海外にいた時の制服なのだろうか、紺のブレザーに赤いチェックのミニスカートは、セーラー服を着ているこの学校の女子の中では彼女をより年上に見せる。でも、この

制服、どこかで見た事のあるような気がするが、思い出せない。ありがちな制服なのか。

当の帰国子女の転校生は、クラスの興奮とは反対に無感情に表情を変えず、まっすぐ前を見据えていた。

一体何者なのだ、という不信感で一杯の俺は、疑心の視線を送っていた。

突然、転校生がちらつとこちらを見た。切れ長が俺の目と合い、急いでそらしたつもりだったが、俺が見ていたのがばれただろうか。興味があるなんて思われたら嫌だな。

そう思つてわざと不機嫌な顔にしていると、転校生が入るとよく聞くあの台詞がこの教室でも言い渡された。

「えーっと、席は……。一番後ろが空いてるわね。杉田さん、目悪くない？ 後ろでも大丈夫？」

空いてる席の横に座っていた男子は、急いで鏡を出し、髪型を整えている。

しかし、杉田という転校生はまったく違う事を言い出してくれた。「恐れ入りますが、希望する席があります。そこではまずいでしょうか」

意表をついた発言に石川先生も驚いている。教室も一瞬シンとなった。何かおかしいと思っていたが、やっぱりちよつと変な子だな、と俺も思った。それとも、これが帰国子女というもののなのか。

クラス中が彼女の次の言葉を待っている中、その転校生はすつと右手を上げ、まさに俺のいる方に向けて指を指した。

なんだなんだと、教室中が転校生の指さす先に注目する。同じように、俺も前後左右に首を回して何事かと見回したが、何を意味しているのかはわからない。

「田中雪広さんの後ろの席を希望いたします」

静まり返った教室に、一気にどよめきが起こった。何より俺自身が飛び上がりそうになった。

「杉田さんと田中君はお知り合いだったの？」

先生が俺に向かって聞いていたが、浴びせられるいくつもの視線に息ができない。今日二度目の酸欠状態だ。真っ赤になって、まともらない頭で何かを言おうとするが、なんと言っているのかわからない。

「いや、えーっと、あの……ですね」

完全にパニック状態だ。

「ええ、ちよっとした知り合いです」

杉田真紀緒はあっさりと言い切った。

よく池で見る、餌を欲しがり水面に顔を出す鯉を思い出してみて欲しい。まさに俺はそれだった。否定をしたいのだが、これ以上の話題を広げて注目を持続させる事にも恐怖を感じ、どうしていいのかわからないが、何かを言わなければ、とカラッカラになった口をパクパクしていた。

「あら、そうだったの、奇遇ね。だったらそうね、何かと安心だろうし、そうしましょうか。じゃ、梶原さん、悪いけど一番後ろの席と交換してもらってもいいかしら？」

俺の後ろの席にいた女子が嬉しそうに返事をし、一番後ろの席に移っていった。

何も言えないままの俺は、教室に向かって軽く会釈をしてからこちらに向かってくる転校生を、見つめるしかなかった。

「さあ、では残り時間も少ないですが、英語の授業を続けます」

まだあちこちで話し声の聞こえる中、俺にはもう何も聞こえなくなっていた。背後にいる転校生が、なぜ俺と知り合いだなんて嘘をついたのか、その前になぜ俺の名前を知っていたのか。思い返せば、朝会ったあの少女との関係も何かこの事と繋がっているのか。

その日の英語の授業は、何一つ頭に入らなかった。

俺はその日一日、一度たりとも後ろを向かなかった。授業中はもちろんの事、休み時間はその場にすらいられなかった。クラスメイトが、入れ替わり立ち代わり転校生に声を掛けにくる。他のクラス

の生徒まで、季節外れの転校生の噂を聞きつけて見に来る始末。

その度に俺にもちよっかいを出されては困るので、授業が終わると同時にトイレに駆け込む。しかも毎休み時間逃亡し続けた。草哉が訳を話せとトイレまで追いかけて来たが、勘弁してくれと頼んだ。俺はなんとか謎の転校生出現のショックと、クラス中の好奇の視線を耐え続け、下校の時間を迎えることができた。緊張のしすぎで、数回倒れそうになった時もあったが、なんとか凌いだ。様々な疑問は残っているが、今日どうしようなんてこれっぽっちも思わなかった。とにかく、この場から逃れる事が最優先だ。

後ろの席に座っている転校生には目もくれず、さっさと下駄箱に向かった。

「おい、待てよ、ユキ。一緒に帰ろうぜ」

後ろから草哉が追いかけて来た。仕方なく急いだ足を止める。

「一緒に帰るって言ったって、お前電車通学なんだから駄だろう」

草哉も野次馬心には勝てないようだ。

「まあまあ、そうだけどさ。今日お前んち寄ってっていい？ ほんところご無沙汰だったし」

俺の家が学校からすぐである事もあり、草哉はたまに学校帰りに家によって、DVDやらゲームやらと一緒に楽しんで行く事もあった。しかし、今日ばかりは、草哉の興味は美少女キャラではなく、人間の女の子の事のようなのだ。

「最近金欠だから、何も新しいもんはないよ。それに今日はちよつと疲れたし……」

なんだ、と残念そうな顔をしている草哉の肩越しに見えた影に、俺はまた呼吸が止まる。こちらを見たままの草哉は固まった俺に首を傾げる。

「大丈夫か、ユキ。お前そんなに疲れちゃったのか……」

「田中さん。お帰りでしたら、ご一緒してもよろしいですか？」

その声に草哉が振り向き、草哉も一緒に固まった。

杉田真紀緒だった。返事をしないで佇む俺に向かって、もう一度

問いかけた。

「田中さん？」

その場にいた他の生徒達も、噂の転校生の存在に気づき、わざわざ足を止めて見ている。その状況が俺をまたパニックにする。とにかくここから離れなければ。その一心で俺は、後先を考えずに杉田真紀緒の腕を取って校門へと走った。草哉や周りにいた生徒達は、見てはいけない物をみてしまったような顔でその後ろ姿を見守っていた。その途中に二力子の姿が見えたような気がしたが、確認する余裕などもちろんなかった。

校門を出ても、すぐには止まらなかった。誰の視線も完全に拭いたかったからだ。家へと向かう道を少し進んでから辺りを見回し、息を荒げて立ち止まった。杉田真紀緒は力を入れて反抗する事もなく、素直について来ていた。

やっと少しずつ冷静さを取り戻して来たところで、ずっと杉田真紀緒の腕を握りっぱなしだったことに気づいた。

「ああ、すいません、すいません。ごめんなさい」

ぱっと離れた腕に向かってペコペコと頭を下げた。

「田中さん。なぜ謝るのかわかりませんし、私は田中さんに謝って頂きたい事もありますので、お気になさらず」

今まで一緒に走っていたのに、まったく息をいらしていない様子で、感情を現さずに話しかけて来た。

俺は朝見て以来、この転校生の顔どころか姿すら直視していなかったが、改めて見ると、喋り方も然り、大人っぽい子だな、というのが一番の印象だ。

「はあ。すいません」

言ってから、今言われたばかりなのに、また謝罪を意味する言葉を軽々しく使う、日本人ならではの口癖を恨んだ。

「とにかく、帰りませんか。ここにいても仕様がないですし」

そう言い、杉田真紀緒が一人、先を歩き出した。俺はぼんやりそれを見送りながら、やっと一人になれる、と安堵しつつ歩き出した。

今日は何かがおかしい。考えてみれば、朝父がいた事から、いつもとはずれていた。それにあの少女だ。今前を歩いているあの転校生に、ほとぼりが冷めたら一度それとなく聞いてみよう。

何はともあれ、周囲から注目されるなんて事には慣れていない俺は、力みすぎて疲れた。やはり、学校なんてところでは、誰にも気にされずに静かに生活しているほうが、俺にとっては楽なのだ。俺には、自分が自分らしくなれる世界が他にあるのだから。

はあ、もうすぐ家に着く。今日はのんびりとチャットでもしてネットの友人達とアニメの話でもして気を紛らわそうかな。

そんな事を考えながら、ふと前を歩く転校生をみて思った。

あの子、どこに住んでるんだろう。駅に向かっている訳でもなさそうだし、この先にいくなら、自転車に乗っても良さそうな距離になつてくると思うけど。あれ。まさか迷ってる？ そうだよな、まだ引越して来て間もないなら、俺が引越張って来たせいで迷ってるとか？ やばいな、俺の家もうすぐそこだし、どうしよう。

その場で立ち止まり、どうすべきか迷う。近寄って行って、帰り道を教えてやるべきか、それとももうこれ以上関わらないうちに家に入ってしまうか。

やはり、ほっておくのもまずいと思って、声をかけようと彼女の背中を追いかけようとした時だった。

「は？」

つい、声にしてしまう。

今、どこ入って行った？

一度目を強く瞑ってから、眉毛ごと大きく開いて焦点を合わせる。やっぱり、だった。今日はとことんおかしな事が起きる日なのだろう。

第四話

「ただいま」

こんな玄関のドアを開けるのが、憂鬱だったことがあっただろうか。声も普段の二オクターブくらい低くなる。そして、目に入ってきた、見た事もない靴。女物のローファータイプの革靴だ。転校生が入って行ったのは、やはり、俺の家だったのだ。

自分の家ながら、恐る恐るリビングに入るドアを開けた。

「あら、お帰りなさい、雪広」

母が俺を認めて、一声かけたがすぐ台所に消えた。もう一人の気配があるソファーにゆっくり目だけを向ける。

「んんあ！」

自分でも、こんな声が出せるなんて知らなかった。息を吸うのと同時に出了た、げっぷのように腹の奥からわき上がって来た声だ。それほど、その光景は俺の肝を潰した。

リビングのソファーに足を伸ばしてリラックスして座っていたのは、朝話しかけて来た、あの少女だった。少女は気づいて、こちらを向き、朝にも見せたようなどこか営業的な笑顔を見せた。俺は眉間にしわを寄せて、その光景を何かの間違いなのではないかと、いぶかしんでいた。

廊下からリビングに入ろうとしたまま、放心状態で入り口に立ち尽くしていると、二階から誰かが降りてくる音が聞こえる。

振り返ると案の定、転校生の姿が見えた。

「おかえりなさい」

「あ、あああ、ただいま、です」

ここは我が家のはずなのに、俺は縮こまっていく一方だった。隙をみて、リビングを抜けて台所に滑り込んだ。いつもとは違い、今は母だけが俺の味方に違いないからだ。

「母さん！　なんだ、あの二人。何者だよ。なんでここにいるの？」

ねえ！」

むこうに聞こえないように、声をひそめながらも母をつつく。
母はむっとした顔で振り向く。

「あんたはうるっさいわねー。若い娘さんが二人もいるからって、そんなに興奮しないでちょうだい。ちゃんと説明するから」

「興奮って。そんなんじゃないから！」

慌てて口を抑えたが、すぐに、なんで俺がこんなに恐縮しないと
いけないんだ、と頭を抱える。

その様子を不思議そうに見ながら母は首をかしげる。

「あんた、なんか変な物でも食べたんじゃないでしょうね。動きが
おかしいわよ」

俺はもう泣きそうだった。朝からのドタバタで、かなりの精神的
ダメージを受けている。

弱っている俺を見て、これ以上いじめるのもかわいそうだと思っ
たのか、母は素性を話し始めた。

「あの子達はね、お父さんの会社のお得意さんのお嬢さん達でね。

一度家族で日本に帰って来たんだけど、親御さんたちが、急に仕事
でまた海外にとんぼ返りする事になっちゃって、こっちで生活する
準備をしていた子供達だけ、しばらく預かってくれなかったって言わ
れたんだって」

「はあ？　なんでうちでなんだよ。っていうか、父さんの知り合い
って誰さ、母さん知ってる人？」

母は肩をすぼめる。

「知ってる訳ないでしょ、母さん、お父さんの会社がどこにあるか
さえ知らないんだから」

一瞬、母親の顔を見返した。

どこの誰の子供かも知らずに預かっていると言う事か。なんと言
うか、感心すらしてしまう。自分の親ながら、変なところで懐ので
かさを発揮するな、と思うからだ。普段、ごくごく一般的な主婦の
代表のような立ち居振る舞いしか見せない母だが、例えば天変地異

に見舞われるような異常事態には、誰よりもデンと構えて冷静な判断をする姿を想像できてしまう。一言で言えば、肝っ玉母さんの素質を持っている、と言うことか。

そんな母から得た情報は、とても身のあるものだった。

なるほど。だから、杉田真紀緒は俺の名前を知っていて、あの少女は俺に声を掛けて来たって事か。納得。でも、姉妹にしては、全然似ていないような気がする。転校生は完全に日本人、ないしはアジア人だと思える風貌だが、妹の方はあの髪の毛の色だし、顔立ちも欧米の血を引いているように見える。まあ、海外に住んでいた姉妹だ。親のどちらかが外国人ならば、あり得ない事でもないのだろう。単一民族国民である俺には、その辺の事はよくわからないが、きつとそういうものなのだろう。

って、預かる？　ここで！？

「ちよつと、母さん。あの子達、どのくらいここにいるの？　両親って、すぐ帰って来れるんでしょう？」

「さあね。父さんはしばらくって言ってたけど、別に母さん構わないもの、いつまでいてくれたって。だってー、母さん、娘欲しかったんだものー。こんな、野暮つたい息子一人の世話してるよりも、あんなにかわいい娘が二人もいてくれたら、母さん楽しいし」

一瞬でも味方だと思ったのは、間違いだった。味方どころか、三対一の形勢になっている。

どおりで、柄にもなくクッキーと紅茶なんてものを用意してる訳だ。母は完全に歓迎ムードなのだ。

「まじかよ……」

ふらつきつつも壁に手をつきながら、なんとか体勢を保つ。

とりあえず落ち着こう。まずは自分の部屋に戻ってゆっくりしようと思い、またコソコソと隠れながら二階に逃げ込んだ。

後ろ手に部屋の扉を閉めると、まず一つ目の大きなため息が出た。これは一安心のため息、という感じた。母の話を聞いて、もやもやしていた大部分がすっきりしたし、明日以降、草哉や他の生徒に何

か聞かれても大筋の事は答えられる。

しかし、この家であの姉妹と一緒に暮らすとは。しかも一人は同じクラスときたもんだ。元々俺が、家にいても部屋から出ないやつだから、四六時中気にしないといけない訳ではないが、例えば風呂とかトイレとか洗濯物とか、年頃の女子の事はことさら不慣れなので、色々面倒そうだ。

それを考えると、もう一つ大きなため息が出た。これは、これから先が思いやられる、のため息だ。

ズルズルと寄りかかったドアをずり落ちていく。その場に座り込み、膝の中に顔を埋める。心身共に今は休息が必要だ。体から緊張していた力みが抜け、そのままうなだれていた。しかし、それも長くは続けることはできなかった。

ゴンゴン、ゴンゴンゴンゴン。

背中ドアが揺れる。

「ユキ君、ちょっといいですかー？」

この声誰だ？ ユキ君だと？ あの妹？

「ちょっとお話聞かせてもらえませんかー？」

「ぶっ」

思わず吹き出した。ワイドショーのリポーターにでもなったつもりか。そういうのに憧れる年頃か？ でも、遊ぶなら違う遊びをする。もう、勘弁してくれ。一人にしてくれ。

ここは寝た振りだ。さつき帰って来たのにもう寝てるのは不自然かもしれないが、とにかく今は相手をしたくない。俺は物音を立てないように、体を固く丸めた。

どうしてこうも、年下の、それも今は顔すら見えていない相手に対して、怯んでしまうのか。そもそも、俺は同年代の女の子とまともに話した事なんかないんだ。困惑するのも当然だ、と思う自分と、なんで男らしく堂々とできないんだ、という自省の気持ちで複雑になる。

「開けてくれませんかー？　ちょっとでいいんでお話お願いしますー」

ドンドン、と部屋中に響く音で薄い木製のドアを叩き始めた。

あーあ、テレビの見過ぎだ。いや、でも、日本のワイドショーみたいなものって、海外でもやってるものか？

「聞こえてないのかなあ」

「今はお疲れなのかもしれませんが、アキラD」

ドアを挟んだすぐ向こうに、妹だけではなく転校生の方もいるようだ。アキラ？　妹の名だろうか。そういえば転校生の方は学校で名前を聞いたから知っているだけで、どちらにも自己紹介さえしてなかった。

しかし、『アキラ』と言うのが妹の名前なのはわかるとして、その後『デイー』って言うてなかったか？　しかも妹に敬語って言うのも不自然だ。

「ちゃんとした挨拶も自己紹介も、今後のスケジュールも話しておきたかったんだけど、アポとってないのはこちらのミスだな」

「申し訳ありません、もう少し余裕のある時間配分を今後は心がけます」

おかしいだろ、なんの寸劇だ。お前ら、なんとかごっこをする歳じゃないだろう。この姉妹一体何者なんだ？

ちよつと待てよ。ヤバい人達か？　どこかのヤバい団体に属してたりして、聞いた事のないようなヤバい神様とかを信じてて、俺をそのすばらしい世界に案内しようとしてるんじゃないだろうな！　絶対そうだ。そうに違いない。いや、そうじゃなかったとしても、スケジュールだの、アポだの、何かしら良からぬ物に俺を巻き込む為の段取りを話し合っているのは明らかだ。無視だ、徹底無視！　関わらなければ問題ない、それしかない。

「どうしましょう。お夕飯のお時間にはいらっしゃるかもしれませんが、それまで待つてみましょうか？」

「うーん、もうこっちの準備も出来てるし、スタッフも待たせてあ

るからね。明日からスタートできるように、今日中になんとかしたいな」

「そうですね。明日、学校に行かれる前では、慌ただしいでしょうしね」

おつとおつとー？　なんとかしたいなって、何する気！？　明日から何させるつもり！？　スタッフ待たせてあるって、どこで待ってるんだよ。

ただでさえ、学校で目立ってしまった一日を、やっと終えたところなのに、明日も学校でつきまとわれたら？　無理だ。体が持たない。俺にとって、周囲の注目というのは、日焼けみたいなものなのだ。慣れている人が日々少しずつ浴びる分には、気持ちよくもあり、見かけがよくなったりするが、俺みたいに慣れていないタイプの人間が突然一気に強いものを受けてしまうと、怪我をしたのと一緒に後を引きずるような大ダメージを受ける。今日の日差しは強かったのだ。まだその火照りは冷めきっていない。日陰にこもって、ほとぼりが引くのをじっと待つときなのに！

「もし、明日の朝もお話できないようなら、私が学校でへばりついてでも時間を作っていただけに致しますので」

「うん、そうだね」

「冗談じゃないよ！」

気がつく俺は、勢いよく立ち上がり、自らドアを開け、人の部屋の前で立ち話をしている姉妹に噛み付いていた。

「何をするつもりなのか知らないけど、俺に関わらないでくれないか。あんた達がこの家にきた理由も、その経緯も知らないけど、俺は家にいられるのすら迷惑なんだ。我慢する他ないって諦めてたときに、なんだか俺を企みに巻き込もうとしてるだろ。不愉快だ！即刻中断してもらいたい。っていうか、しろ！」

突然開いたドアの間から、鬼のような剣幕でまくしたててしまった。息をするのも惜しんで一気に吐き出した後、鼻から息を大きく吸ってから、睨みつけたはずの相手は、一人は無表情、もう一人は

作り笑顔でこちらを見ていた。びつくりするとか、後ずさりするとかを想定していた俺が拍子抜けをするほどだ。そして、姉妹を目の前にしていると、高ぶった感情が引いて行くのと引き換えに、体が萎縮して行く。

「……あのお、聞こえてます？」

返事をしたのは、目の前の二人ではなく、下階にいる母の怒鳴り声だった。

「ユキっ！　うるさい！　思春期のストレス発散は外でしてきてちょうだい！　近所迷惑でしょ、そんな大声でしたら！　バカ！」

確実に母の怒声の方が大きかったと思うのだが、今はその相手をしている場合ではない。しかし、今の俺の言い分を理解したとは言い難い表情の姉妹を見て、大声を上げた自分がなんだかばからしく見えてきた。結局、部屋で狸寝入りをしていた事がばれただけで、メリットはなかった。

意気消沈した俺は、もう引き戻す事も出来ず、出来れば避けたかった話を持ちかける。

「あの……、汚いところですが、部屋でお話伺いしましょうか？」

言うが早いか、アキラと言う名の妹は、ピョンと跳ねて廊下から俺の部屋に入ってきた。

「よかった、ユキ君と話ができて」

「お言葉に甘えて。では、失礼致します」

杉田真紀緒は、ドア前でスリッパを脱ぎ、一礼してから入ってきた。ことごとく正反対な姉妹だ。アキラの方は、スリッパすらはいていなかったのに。

「おおおお。このゲーム、戦闘シーンがかっこいいんだよねー。敵に切り掛かるときのエフェクトが綺麗でさー。こうさ、ピカーンってなってさ」

振り向くと、アキラは躊躇なく布団の上にあがり、壁に貼ってあったポスターを見ていた。

「そのゲームの事、知ってるんですか？」

それは、一年位前、今では超有名なゲームクリエーターチームの『アトリエ・A』が、アマチュア時代に作っていたパソコン用アクションゲームを、雑誌の企画で限定二百本だけ復刻されたものだ。気合いで送った葉書が当選し、幻のゲームを手に入れたときにこのポスターも一緒に送られて来た。しかし、タイトルやキャラクターを見た事があるというのならまだわかるが、プレイしてみないとわからないはずの、戦闘シーンの事も知っているらしい。

「知ってるよ、もちろん。私の友達で知らない人いないと思うよ。」

『アトリエ・A』のゲームは全部クラシックに入ってたからクラシック？ 音楽の？

俺の知る中でも、このゲームの存在を知ってるのは、かなりゲームの世界に深くのめり込んでる人だけのはずだ。しかも、女の子のあまり好まないアクションゲームで、クリエーター名まで言えるのは、かなりの通のはず。

「ゲーム好きなん……」

「アキラD、早速お話を進めさせて頂いてはいかがでしょう。田中さんも、今日はお疲れでいらっしやると言う事ですし」

『デイー』ってなんなんだよ、と杉田真紀緒を見ると、まだドアの脇に立ち、体の前で手を重ねながら、下目使いで控えめに言う。疲れている？ そういえば、俺が草哉と下駄箱で話していたのを聞いていたのか。なんていうか、気の利く人だな。とても同級生とは思えない。

「そうか、それもそうだね。ま、ユキ君、座ってください、遠慮してないで」

自分の部屋だから、しませんよ、遠慮は。しているのは、緊張です、あなた達にね。

他に座るとこもないので、アキラはその布団の上にペタンと座り込んだ。白いワンピースの裾が丸く開いて、俺の古くさい花柄の布団を覆った。

杉田真紀緒は、ドア脇にそのまま正座で座ったので、俺も、そし

てなぜかアキラも、そんなところでは足を痛くしてしまうでしょうに、と氣遣ったが、どうぞお構いなく、と予想通りの返事で断った。俺は、一旦部屋を見回して、やはりいつもの座布団へと向かうべく、映画館に遅れて入って来て、座席が前の方しか空いてなく、上映が始まってるのにスクリーンの目の前を腰を曲げて横切る人よろしく、部屋の一番奥の定位置まで移動した。

アキラはまだ、俺の部屋の中を珍しそうに見回している。俺は、まるで自分の秘密を見せているようで、ものすごく恥ずかしかった。別に見られてまずいものがある訳では、ない。まあ、細かく言えはない訳でもないが、その辺はうまい事であるので大丈夫なのだ。というのも、普段学校に行って俺が家にいない時は、母親も自由に出入りできるようにする、というのがパソコンを買ってもらった条件の一つだったからだ。二年前当時からワイドショーやニュース等でネットを使った青少年の犯罪や問題が取沙汰されていた。完全に侵されていた母親をねじ込むには、その程度の代償は仕方なかったのだ。だから、ある程度人に見られる事を想定した部屋作りなので、問題はそこではない。

要するに、恥ずかしいと感じるのは、オタクである確固たる証拠が詰まったこの部屋にある全てが、興味のない人にとっては、『きもーい』物に映るからだ。そしてその『きもーい』部屋の主人が俺なのだ。それは、俺の趣味を、ではなく、俺自身を卑下されているように感じるのだ。

情けない気持ちになりつつも、座布団の上で正座をした。これからどんな話を聞かされるのかという興味より、早く終われ、早く出て行ってくれという懇願を頭の中で繰り返していた。

「それで、だ」

口火を切ったのは、アキラだった。手を両膝の上でパンツと叩き、布団の上で体ごとこちらに向き直った。

「まずは、自己紹介させてもらいます。私は、五十嵐晶。それから、あそこに座ってるのが、あ、もう知ってるか。学校で会っているも

んね」

首を後ろに向けて晶が真紀緒に同意を求める。

「ええ。学校で自己紹介の時間を頂きましたので」

真紀緒は、ゆっくり頷きながら言った。

五十嵐？ 姉の方は杉田なの？ 夫婦別姓っていうのは聞いた事があるが、姉妹でもそういうのってできるのだろうか？ それとも、もっと複雑な家庭環境なのか。

「そうかそうか」

晶は満足げに向き直り、続けた。

「それなら、早速本題に入っていかな」

「はあ」

準備はできていた。とにかくどんな誘惑や信仰があった事を言われても、心を固く閉ざしてさえいればはね除けられるはずだ、と。適当に受け流し、早くこの部屋から出て行ってもらう事だけを考えるんだ。

「田中さんには、私たちの作る番組の主役を務めて頂きたいと、お願いにあがりました」

さっきまでの砕けた口調ではなく、やけに改まった話し方するな、と話の輪郭だけ聞いていた。聞き入っちゃだめだと思っていたからだ。

はいはい、主役ね、番組の。よくある話だよ……。

「は？」

よくある訳ないだろう、こんな話！

「田中さんに、私たちの番組出演のオファーをしたい、という事です」

もしこれが、何かの団体の勧誘か、悪徳商法のセールスだとしたら、俺はまず確実にひっかかっただろう。なぜって、あまりに突拍子もない話すぎて、つい先が気になってしまったからだ。どういう事なのか知りたい、と思っってしまった。

「どうですか。やって頂けますね？」

「いや、ちょ、ちょっと待ってください。あの、一体どういう事だか……。全く話が見えせんし、やるもなにも、テレビ番組って、どこかのテレビ局の方なんですか？　だってまだ学生じゃ？」

「晶D、私たちの来たところからお話しませんと」

「ああ、そうだった。すっかり気が焦ってしまつて。つい核心から言つてしまつた」

「ははは、と笑う晶と、微笑みで返す真紀緒。両者を交互に見ていた俺も一緒に愛想笑いをしておく。本当は泣きたい気分だけど。」

「私たち、二　八五年のOBSというテレビ局から、田中さんを取材しに、この時代に来たのです」

「ああ、なるほどね。これは夢か。」

俺は悟つた。先ほど部屋に戻つて来てうずくまつた時、自分でも気づかないうちに、疲れてとうとうと寝てしまつたのだろう。そういう時、レム睡眠になりやすいものだ。もしかしたら、今日一日全部夢つてこともあり得る。父は帰国などしておらず、こんな姉妹も存在せず、俺はいつも通り静かな学校生活をしたんじゃないだろうか。色々あつて驚いたけど、全部夢オチって事かもしれない。

「ははは」

俺は安心感と開放感で、つい笑つてしまつた。急に余裕ができて、気が緩んだのだろう。

一瞬晶と真紀緒が顔を合わせ、すぐに晶が問いかけてきた。

「それは、承諾してくれた、と言う事で解釈しても？」

「何が？　ああ、テレビの取材？　番組の主役？　オッケー、オッケー。かつこ良く映してくださいよ？」

「やつた！　ありがとうございます！」

晶はガッツポーズを見せ、身軽に立ち上がりこちらに寄つて来た。中腰になり、細い両腕を差し出しながら言う。

「いいものにしますから、頑張りましょう」

俺の右手を掴んで握手するその感触があまりにもリアルで、自分の手をわずかに引いたが、晶がしっかりと握つていたので、びくと

もできなかった。

「あ、ああ。がんばりま……しよう」

後ろでその様子を満足そうに見ていた真紀緒は、ブレザーのポケットから携帯電話のようなものを取り出していた。

振り返った晶は、真紀緒に頷くとその近くに歩み寄った。晶が今後の指示を真紀緒に伝えているようだ。わかりました、と頷く真紀緒は、顔を覗き込ませるようにこちらに向け言う。

「田中さん、お疲れのところ大変お邪魔致しました。本日はこれで失礼致します。今後の件に関しては、朝にでも」

会釈をして、部屋から出て行く。

「さてと、私も局長に報告しないと。じゃ、ユキ君、また明日」

顔の横で、バイバイと手首を動かして部屋から走るように飛び出して行った。

部屋に残されたのは、歪んだ笑顔のまま固まった、俺だけ。

何も考えるまい。これは夢なのだから。

俺は、布団に倒れ込み、そのまま目をつぶった。

第五話

「やっぱり、女の子がいると食卓も華やかねー」

「そう言ってももらえると嬉しいー」

「おいしそうな朝食ですね。頂きます」

和やかな食卓に、俺だけが懨然とした顔で座っていた。とても、爽やかに食事をするような気分ではない。見慣れない女の子好みの洋風朝食がテーブルに並んでいるから、ではない。

トーストにハム、スクランブルエッグ。マグカップに入ったカフェオレと、ジャムを乗せたヨーグルト。

おい、いつもの納豆と白いご飯はどうした。中学の修学旅行で買って来た、新撰組ロゴ入りの湯のみに入れた日本茶はどこだ。

もちろん、口にだして言える訳もなく、ひたすらむっつりしていたのだが、理由はもう一つある。

朝起きて、昨日の夢を思い出しながら部屋を出た途端、俺はまず叫んだ。

「うおお！」

丁度俺の部屋の前から階段を降りようとしていた真紀緒に、ぶつかりそうになった。

「おはようございます、田中さん」

俺はがつくりと肩を落とした。

昨日の出来事全てが本当は夢なのでは、という希望的観測はこの時点で崩れ去ったからだ。さすがに、姉妹が俺の部屋に入ってきてテレビに出演してくださいと頼みにきた、という悪夢以外は、現実だったようだ。

仕方ない。ここはあの二人が出て行くまで、ひたすら耐えぬくしかないさそうだ。

「はああ」

「やーね、この子だったら、朝からため息つくなんて。若いくせに覇気がないわよねー。おじさんみたい」

母は、息子の悩み事なんぞに興味は毛頭ないようだ。それどころか、見苦しいとでも言わんばかりの様子で息子から顔を背ける。

「うるさい。行ってくる」

食卓に座っている事も居たたまれない雰囲気を感じて、朝食に何も手を付けないまま席を立った。まだいつもよりだいぶ早い時間ではあるが、構うものか。

「あ、では私も行って参ります」

「あらあ、真紀緒ちゃん、まだ早いんじゃない？ カフェオレもまだ手をつけてないのに」

聞こえない振りでは俺は、さっさと玄関に向かう。学校への行き方もさして難しい道のりではない。昨日一日で十分覚えられただろう。俺が同行する理由もない。彼女にしたって、俺と一緒にいたら、転入早々、周囲から変な誤解をされて困るだろう。なにより、俺が困るのだ。

躊躇せずに、家のドアを開け飛び出した。歩き出してすぐ、後ろから追いかけてくる音が聞こえたが、振り向きたくなかった。

「田中さん。学校まで一緒にしてもよろしいですか？」

いやだつて行ったところで、向かう先が一緒である以上同じ事だ。ほんの小さく、ため息を吐きながら言った。

「はあ。構いませんけど……」

真紀緒はすつと横に並び、ミニのスカートからすらりとのびた足を軽やかに動かしながら、大きくはないが、はっきりとした口調で話だした。

「昨日の続きなのですが、まだ番組の内容を説明してませんでしたよね。ですので、歩きながらで結構ですので、そのお話や今後の流れをお伝えしようと思いまし……あれ、田中さん？」

横にいたはずの俺を見失った真紀緒が振り返る顔を、ただただ見つめた。

なんて事だ。

どこまでも現実だったと言う事か。じゃあ、テレビだ、主役だなんて話も、まさか！ 俺、快諾しちゃったけど、あれも……。

「大丈夫ですか？ お体の具合でも？」

心配そうに覗きこんでくる真紀緒に、昨日の話をもう一度よく思い出しながら、意を決して聞いた。

「あーっと、あのですね、もう一度全部はじめから、分かりやすく話してもらえますか？ ちょっと、混乱していると言いますか……」

真紀緒は暫し、驚いた様子で佇んでいたが、すぐに頷いた。

「もちろんです。急なお話で驚かれたでしょうし、詳しいお話も全然していませんから、当然の事でしょう。まだ始業の時間まではだいぶありますし、ゆっくり歩きながらお話致します」

晶の押しの強い話し方に比べて、真紀緒は穏やかで丁寧な口調だ。そのお陰で少しずつ緊張の糸を緩めて話せるようになってきた。混乱の頂にいる俺には、ありがたかった。

「お願いします」

真紀緒は、昨夜、俺の部屋で晶が話した事から細かく復習してくれた。

いくつも質問したい事はあるのだが、まず聞きたいのはその中でも一番非現実的に思えるところだった。

「未来から来たって言いますが、それは、冗談ですよねえ？」

ふふふ、と小さく笑ってから真紀緒は答える。

「この時代では、そうですね、冗談の様に聞こえるのでしょうか」

「本当だと言っんですか？ 二〇八五年でしたっけ？ あなたも、晶って子も、その時代から来たと言っんですか？」

細い顎に右手の人差し指をあて、言葉を探しながら真紀緒は答える。

「田中さん、これを言うとなおさら不信感が増すかもしれませんが、決まりで時空移動に関する詳しい事はお話する事が出来ません」

「時空移動？」

耳慣れない言葉だ。なんだか、そのへんのマジシャンが言いそうな感じがする。先に言われた通り、それを聞いても疑わしい感じしかしない。インチキ臭いと言っべきか。

「私たちはある方法で時空を移動してこの時代に来ています。その方法はお話する事はできません。もしも時代を超えた情報を無断で流出させれば、法律で罰せられるだけでなく、情報を知ってしまった当該人物も抹消されるという重い処分が下されます」

「処分？ まさか、殺されちゃうって事じゃないですよね……？」

そんなバカな、という意味で聞いたのだが、返事に困ったその表情の意味する答えは正解のようだった。

「時空を移動するという行為は、私たちの時代でも誰もが気軽に出来るような事ではありません。危険で、リスクの高い行為ですから、厳しい審査と試験にパスし、ライセンスを取る必要があります。それも一年に一人合格者が出るかどうか、という難関です。ですから、そのような迂闊な行為で処罰されるような事をする人はまずいません」

真紀緒はその様子を思い浮かべているように、視線を遠くに置きながら続けた。

「さらに言えば、移動をするにはその都度当局に申請が必要です。確たる目的とその正当性が認められる場合、長い期間を経てやっと許可が出ます。私達は仕事柄何度も経験がありますし、信用もあるのでそれほどでもないですが、初めての場合などは、受諾までに半年以上待たされる事もある程です」

いくら何年先であっても、簡単に時代を移動するなんて事はできない言う事か。それがとんでもない事だ、という認識は、今と変わらないのだな。

「俺もあんまりその事については、しつこく聞かない方がいいですね……」

きつと俺が詳しく聞いたところで、どこまで理解できるかわからないだろう。正直異国から来たのだろうが、異時代から来たのた

うが、どうでもいいっちゃどうでもいい。どちらかと言つと、その話が本当であるかどうかを掘り下げるより、どこまで信用できるかわからないような事の為に、命を危険に晒す可能性がある事に関わりたくない気分だ。それに、それより他にも聞いておきたい事はあるのだ。

「今、仕事でつて言つてたけど、学生ではないんですか？ 学校行きながら働いてるとか？」

ああ、と真紀緒は言つてから自分の着ている制服の端を手で伸ばしてみながら答えた。

「実はこれ、潜入取材用の衣装なんです。今回、田中さんをより近くで取材をできるように、私が同じ学校に入学するという事になったので、この時代の資料から、適当に見つけて制服を作らせたんですが……変ですか？ 何でしたか、確かアニメの主人公の学校の制服で……」

思い出した。どこかで見た覚えがあると思つたが、去年放送していた深夜アニメのヒロインが、こんな制服着ていた。暇な時たまに見ていた程度だったから、すぐには思い出せなかった。

「変じゃ、ないです。全然。っていうか、なんでまた本当の学校のものじゃなくて、アニメのキャラが着てた制服作っちゃったんですか……」

「この時代のものならなんでも良かったんです。私たちの時代の学校では、制服そのものがもう廃止されていますし、もしあったとしても、私は二年前に大学まで卒業してしまつていたので、持つていませんから」

「え？ つて事は真紀緒さん、今いくつなんですか？ タメじゃないの？」

言つてからすぐ、女の人に年齢を聞くのは失礼だ、と思い直し、いや、そのー、とどもつていると、真紀緒は声をだして笑つた。

「氣を使わないでください。私は田中さんと同じ、十六歳ですから」……でも、大学まで卒業つて言いませんでした？」

にこやかに頷き言う。

「ええ、飛び級ができるので。私は十四歳で大学を卒業して、OB
Sに入社、今年二回目です」

確か、海外では現在も、飛び級制度を取り入れているところがあったはずだ。小学生くらいの子が大学に入学しちゃった、なんていうニュースを見た事がある。それが未来では一般的になっているのか。

「おおお、もしかして？　こう言っちゃなんですが、真紀緒さん、頭いいんですか？」

ずっと同じ速度で歩いて来たが、初めて真紀緒が足を止めた。ん？　と見ると、手を振って謙遜している。

「いえいえ、とんでもない。私なんて、まだまだです」

少し顔が赤い。照れているのか。ずっと感情のない人だと思っただけに、意外な所を見れた気がした。

「晶Dなんて十歳で大学を、しかも主席でご卒業されたんです。飛び級制度があるとはいえ、平均大学卒業年齢は二〇歳程度の中、です」

真紀緒もそうだが、晶も相当のエリートと言っことらしい。だから、真紀緒は晶に敬語を使い、晶はあんなに偉そうに話していると。なるほど。また一つ疑問が消えた。

「十歳ってここなら、まだ小学生五年生か。すっごいな……。って、あっ？」

「はい？」

そう言えば、これは昨日も気になった疑問だ。今までの話からすると、俺の予想はこうなる。

「あの、晶さんと呼ぶとき、『晶ディー』って言いますよね？　それってもしかして、晶さんがディレクターって事ですか？」

先ほど照れたときだろうか、少し乱れた前髪を丁寧な右耳に掛け直しながら、首を縦に動かす。

「ええ、正解です。晶Dがディレクターで、私はアシスタントです。

今回の取材班は二人だけです。私が撮影と音声を担当し、編集と監督を晶Dがこなします」

「ってことは、やはりお二人は姉妹ではないんですね。なんとなく感じてはいましたけど」

「ええ、はい。どなたかのお宅において頂く時は、この設定が一番怪しまれないので。ご家族の方には嘘をついてしまつて申し訳ないと思つていますが、正直なお話をする訳にもいかず、やむを得ず。田中さん。この事はどうか内密にお願い致します。この事に限らず、一連の私たちの秘密も含め、ですが」

「……誰かに話したとしても、誰も信じてもらえないと思いますから。大丈夫ですよ」

やはりそうか。なんとなくわかつてきた。が、そうすると、いよいよ、本題に突入しなければならぬ。今まで彼ら自身についての話をしてきたが、ここからは俺に直接関係する部分だ。

「それより、一番わからない事でもあるんですが、番組に出演とか、取材とかつて、こういうことなんでしょうか」

仕事とプライベートの切り替えという感じだろうか。真紀緒も緩やかだった表情を一瞬で引き締め、小さく咳払いしてから説明し始めた。

「私たちが今作っているのは、歴史ドキュメント番組なんです。実在する歴史上の人物を取り上げて、その人の活躍ぶりや人物像はもちろん、その時代の生活スタイルなども含めて、身近な視線で追いかけていく、という企画です」

「歴史……ドキュメント……ですか」

よく聞くようでそうでもないようなカテゴリーだが、そんな感じのテレビ番組は何度か見た事がある。なかなか面白かったから覚えていた。たしか国営放送だったと思うが、有名な人物の、歴史の教科書には載っていない、人間的な裏側のようなところを紹介する番組で、どんなに英雄や天才と言われるような人も、自分と同じ人間であるに違いはないと思わせるような、失敗談や意外な弱点を見せ

る内容は、しばらくは毎週の放送を楽しみにしていたほどだ。その類いなのだろうか。

「先ほども言いましたが、私たちは時空移動をする事ができますので、番組で取り上げる時代に私たち取材スタッフが直接赴き、生の映像と目の前で仕入れた情報をお送りする、と言っのが売りなんです。晶Dが考えた企画から始まったんですが、毎回高視聴率で、教育的にも社会的にもいい影響を与えている、と政府も時空移動を積極的に使ってよいと言うお墨付きまで頂いたんですよ！」

自分の事を話すように嬉しそうに話している。きつと真紀緒にとつて、晶は年下ではあれ、憧れの先輩なのだろう。

「じゃあ、肖像画とかでしか見た事ないような昔の人も、実際の映像で見れちゃうんですか？ それ、見てみたいなー」

「ええ。前回の主役は……あ、名前は言えないんですけども、戦国時代に活躍された將軍で、みなさんご存知の顔とは全く違つてびっくりしましたけど、やはりご立派な方でした。桶狭間での戦いの回は、番組最高視聴率……あっ！」

俺も真紀緒も見開いた目を同時に向ける。

ちよつとちよつと。今桶狭間つて言つた？ 桶狭間で有名な戦国武将つて……、一人しか思い浮かばないんですけど。

俺は、想像以上に大きな話になりそうな予感に、朝っぱらから汗をかき、真紀緒は、まずい事を言つたというのがバレバレな様子で空を仰ぎ、それでなんの話だったっけ、などとごまかしていた。

「あ、あのー、それで前回がその方で……、次が……？」

真紀緒はわずかに弾んで左右の足を揃え、かしこまって言う。

「はい。今回が、田中さんなんです」

「そんな。だつて、歴史上の有名人の番組なんじゃないんですか、取り上げるのは？ なんでまた俺？ 一般人の回とかもあるんですか？」

「何をおっしゃいます」

真紀緒は眉間にしわを寄せ、強く言つた。とんでもない事を。

「だって、田中さんは立派なおタクじゃないですか！」

ちょうど差し掛かった小さな交差点で、信号待ちをしていた時だった。俺は、倒れそうになる体を電信柱にもたれる事ができなければ、倒れ込んだだろう。

「田中さん？ 青ですよー？」

横断歩道を渡った向こう側から、呼びかけられた。

学校までの距離は、もう半分以上進んで来たが、たどり着けるかどうか、俺は心配になった。

俺がおタクだから、だと！？

第六話

俺は相変わらず授業に身が入らなかった。

通学中に真紀緒から聞かされた話を、何度も思い起こしては、頭を抱える繰り返し。

なぜ俺が今回の主役に抜擢されたか、は『オタクであるから』という理由以上は教えられない、と真紀緒は言う。もし、それを話してしまつたら、これから起こるはずの、俺の知らない未来を教えてください。真紀緒にとっては犯罪行為になるのだと言う。それはすなわち、俺自身も危うくなると言う事だ。

ずるいだろ、それ。

俺は、あたつても仕様がなと思いつつ、真紀緒を恨んだ。

そんな事言われたら、誰だつて気になるだらう、聞きたくなるだらう？ 最後まで言えないなら、中途半端に言うなよ。俺がオタクであるが故に、何事か歴史に残るような出来事に関わるって事？

そんな事、あり得ないってー！

そして、その取材にこの時代を選んで、わざわざ未来から来たという事は、きつとそろそろ何かしら事件とか、異変とかが起こると見て間違いないだらう。いや、もしかしたら既に始まっているのかも知れない。思い出せ、ここ何日かで変わった事はなかったか？

学校で、家で、何かいつもとは違う事。俺は、授業を書き取っているかの様に、ここ最近の変わった事を書き出してみた。

白紙の見開きのページに書けたのは、

・父が帰って来た。

・母にオタクであるとバレた。

以上。

めちやくちや身内の出来事しかない。これのどのへんが歴史に残る出来事になるのか、どう捻くつても想像がつかない。しかも、どれだけ絞り出そうとしても、これ以上の何事も浮かばない。それ程

に一昨日までの俺の日常なんてものは、代わり映えのない毎日だったってことだ。

ゆっくりとぼぼまっさらなノートに顔を埋める。すぐに息苦しくなつて、そのまま首を左に曲げ、窓の外を眺める。

今日は、校庭から楽しそうな歓声が聞こえている。体育をしているクラスが、チームを分けてリレー競争をしているようだ。ただ走れと言われるより、チーム対抗となるとどうしてか俄然盛り上がってくる。見える限りの生徒達の表情は、どれも笑顔だ。

うらやましいと、思った。

高校生らしい青春のページを送っている彼らと同じ空間にいないから、俺は、なんでこんな得体の知れない悩みに踊らされているのか。

別に俺は、何も望んでなんかいなかったのにな。

ゲームやアニメを見ている、あの部屋が全ての自分の生活。誉められたもんじゃないって事はわかってはいるが、今は満足しているんだ。この毎日に変化なんていらなかったのに、なにがどうなったんだ？

未来のテレビ番組に出演。しかも主役。

どんなに楽観的に考えようとしても、ため息しか出ない。これから、一体どうなるのか。すぐ後ろにいる未来からの転校生は知っているはずなのに、知る事はできない。

はっと思い出し、上半身を勢い良く起こす。

しまった。

真紀緒の言っていた事を思い出した。彼女の両耳につけているとても小さなピアス、あれは超小型のマイク内蔵カメラで、真紀緒の前方にあるものは全て、映像と音声が俺の自宅に設置されたハードディスクにおさめられて行くと言っていた。今日の朝、部屋から出て来た無防備な俺の寝起き姿も、今の授業をまじめに受けていない様子も晶はともかく、何年も先の人達に観られるかも知れないのだ。遅すぎるとはわかっていても、先生が黒板に書いた公式を突然書

き取り始めてみたりした。しかし、取り繕う間もなく、授業の終わりを告げるチャイムは鳴るのだった。

昨日の今日と言う事もあり、まだ物珍しさで真紀緒の周りには人が集まってくるが、俺への波紋は殆どなくなった。一応避難先として、休み時間の間は草哉の席で様子を見ているが、わざわざ声を掛けてくる物好きもいない。結局は、『普段は関わりたくないオタク』の一人なのだ。

「なあ、本当にお前と杉田さんって知り合いなの？」

草哉は、昨日の真紀緒のちよつとした知り合い宣言がまだ気になっ
っているらしい。

「ああ。親同士がちよつとした知り合いらしいけど、俺は知らなかったし、昨日まで会った事もなかったしな」

必ず聞かれるだろうと、あらかじめ考えておいた通りに答える。

「ふーん。でもさー、かわいいよなー。見れば見る程、この学校の女子なんかより、おしとやかでさー。帰国子女なのに、話し方も丁寧で、奥ゆかしいとかさー」

肘を机に立て、顎を乗せて真紀緒の方をうつとり眺めている。

「まあ、目の保養以上にはらなんけどな、生身の女なんてさ」

草哉も今まで、周りからオタクとバカにされ、もちろん女の子にも煙たがられて来た。それも慣れっこになると、このように卑屈なことを自ら言うようになる。どうせ俺なんて、どうせ無駄だ、と。

かくいう俺も、同じ線路を歩んで来たので、気持ちもわかるし、経験もある。

「そっぴや、日曜。行ってもいいよ、オフ会」

「お？ まじで？ ありがと！ 良かったー！ おおおっと、じゃ、早速ルーフェスさんにお前の名前、ちゃんとリストに入れてもらうように伝えないと」

そう言って、早速携帯のメールを打ち始めた。

真紀緒の素性を知っていながら、隠さなければならぬ負い目と、話題を変えたい気持ちでこの件を思い出した。勢いで、オフ会に参

加する事にしてしまったが、まあ多少気が傾いていた事だ、よしとしよう。でも、「ルーフェスさん」って誰だ？ 外人？

カチカチと、素早い指さばきで、そのルーフェスさんだかにメルをしている草哉をぼーっと見ていると、後ろから軽く肩に触れる感触があった。誰かが、たまたまぶつかったのかと、確かめるようにゆっくり振り返ると、そこに立ってこちらを見ていたのは二カ子だった。

「うお」

俺は座っていた草哉の席の机から、落ちそうになった。いつも、出来るだけ近寄らないように、関わらないように、俺なりに気を使っ

て来たつもりなのだが、何事だ。

「な、なんすか」
二カ子は、俺に目を向けたままできなかつたのか、斜め下のほうに視点を移して口を開いた。

「今日、帰りちよつと付き合える？」
すぐには、今聞いた日本語を理解できなかった。飲み込むまでに時間がかかっている為、無言になる。

返事は待っていないようなタイミングで二カ子は続けた。

「今日、部活もないから。とりあえず、後で」

一方的に話を終わらせ、踵を返して教室の外に出て行った二カ子のいた、空を見つめるしかない俺。

「ユキ、なんかお前、石野さん起こらせるような事、したんじゃないの？」

気を抜いていた背後から、面白そうに草哉は言った。

「してねーよ！」

そう言いつつも、いや、何かしてしまったのでは、と必死で記憶を巡るが、やはりない。日曜の件で気を良くしたのか、草哉はご機嫌で、人事だと思って面白そうに冷やかす。

「思い当たる事がなくても、知らない間に、って事もあり得るからな。石野さん、結構他のクラスでも人気あるから、隣に住んでるっ

でだけで、逆恨みされてるかも知れないぞ？　せいぜい、人気のない所に連れて行かれないように気をつけろよ。取り巻きに囲まれてぼこぼこなんてな」

ふふふ、と笑う草哉を睨みつつ、何の目的なのかと、考えてはみたものの、見当もつかなかった。

そして、教室の窓側から、忘れていた視線を感じる。

クラスの女子に囲まれたその隙間から見える、真紀緒のわざとらしくさえ見えるやさしい笑顔だった。

クラスの女子に、しかも幼なじみでもある相手に、ちょっと話しかけられたくらいで動揺をしまくった姿をバッチリ撮りましたからね、って言っている様に見えるんですけど！

気軽に考えていたけれど、いつでもどこでもカメラとマイクがすぐ側で記録を撮り続けているというのは、なかった事にする、が出来ない一発本番の連続のような気がして来た。

気が抜けないって事が、これ。

考える事や、気にしなければならぬ事が多すぎて、そんな身近な事さえ、今頃気づいている自分に、ため息がまた出た。

出来るだけ目立つ行為を避け、いや、特に意識しなくても学校では控えめな立ち居振る舞いの俺なのだが、さらに気をつけて一日を過ごした。

それ程変わった事をしたつもりもないのだが、やけに気疲れしたところで、問題の放課後なのだった。

終業の合図が終わった途端に、くちやくちやとガムを食べながら草哉が駆け寄って耳元でささやいた。

「ユキ、頑張れよ」

「頑張るって……頑張らねーよ、何も！」

「はいはい。あ、杉田さん、さようなら、また明日」

「あ、御門さん。さようなら、また明日」

たった二日で何人のクラスメイトの名前を覚えたのだろう。草哉の名字をあっさりと言い当てている真紀緒に、さすがエリートと感

心している場合ではなかった。

真紀緒と一緒にいて来てもらっては困る。どんな事かはわからないが、プライベートなところまでは、遠慮してもらわなければならない。新しいガムを銜えながら、草哉が大きく手を振って帰って行くのを見届ける。

「杉田さん……」

先に帰っていて欲しいと、振り返って言おうとしたところ、真紀緒は既に鞆を手に持ち、席を立つ所だった。

「田中さん、お先に失礼しますね」

「ほ？」

真紀緒は周りの生徒と挨拶をかわしながら、さっさと教室を後にした。

考えてみればそうだ。俺と真紀緒と一緒に帰らなくてはならない必要はないし、そんな約束もしていない。俺が勝手に、帰宅途中も取材は続くのかと思っていただけだ。安心したのと同時に、なんだか力が抜けた。そこに声を掛けられた。

「もう、準備いい？」

見ると、すこしこわばった表情で横に立っていた二力子だった。

「あ、ああ、すぐ。って、一体何するの？」

言つと二力子はちよつと怪訝な顔を見せてから、早口で言う。

「家に帰る以外に、何か他にあるの？」

「あ、ああ……だよな、ですよね」

「校門で待つてるから、用意できたら来て」

訳が分からないままではあるが、一緒に下校するという事らしい。そんな事今まで、偶然であろうと避けて来たのに、変な気分だ。俺は、適当に荷物を鞆につっこみ、校門へと急いだ。

下駄箱を出て、校庭を横切ったところにある校門の隅に二力子は鞆を両手で持ち、立っていた。

お互いを確認し、特に声はかけずにそのまま歩き出す。つかず離れず、というよりは、着かず着かず、の距離の二人は、端から見れ

ば、たまたま同じ道を通る、見ず知らずの同じ高校に通う生徒二人である。何の為に、わざわざ呼び出されたのだろっ、と少々ふてくされ始めていたときだった。

突然前を歩いていたら二カ子が立ち止まった。つい、俺も驚いて足を止めたが、動く様子のない彼女の横までゆっくり進んで行ってみた。丁度、二カ子の平行に並んだ時、彼女は顔を前に向けたまま話した。

「突然、呼び出したりしてごめんね」

その言葉を言いながら、今度はさっきよりもゆっくりと二カ子は進み始めた。俺も遅れない様に、横を歩いて聞いていた。

「殆ど話しもしてなかったのに、いきなりで驚いたでしょ」

久しぶりに二人で話す二カ子は、昔よく遊んでいた時の口調のまま、変わらぬハキハキと気持ちのいい声だった。なんだか、昔を懐かしむ気持ちになり、俺も素直に答えた。

「うん。何かしっちゃったかな、って。もしかしたら、しばかれるんじゃないかって思って、ビビってた」

「ぷーーーーっ」

大げさに吹き出す二カ子は、すぐに笑い出す。

「やだ、私、女よ？　いくらなんでも、男子を呼び出して、懲らしてやるうなんて、思わないわよ」

お腹から笑う声は、よく通る。これも昔のままか。

「笑うなよ。それくらい、なんで呼び出されたのか分からなかったんだから」

「そうか。ごめん、変に心配させちゃったのか」

なんとなく俺も、自分の不甲斐なさに顔が緩む。

「情けないよな、俺」

「そんな事は……ないけどさ」

二カ子は、やはり顔をこちらに向ける事はなく、そう答えた。そのまま暫く二人、距離を取りながらも家へと向かっていた。

俺が朝、電柱に倒れ込んだ交差点に着いたときだった。信号は赤

で、横断歩道の手前で待たされていた。

「私も聞いたんだ。テレビの取材の事。晶ちゃんから」

一日に二度、電柱に感謝をする事はそうそうないだろう。目の前がぐらつと回り、平衡感覚を失い、また電柱に救われた。

「青だよ」

そう言う二カ子を待たせながら、なんとかしつかり気を持ち、歩を進めた。

「ちよつと……、晶ってあの、小学生みたいな女の子の事……？」

二カ子は、特に動揺する事もなく、今まで通りの口調で話している。

「そうよ。だって、晶ちゃんも真紀緒ちゃんも今、ユキちゃんの家に住んでるんでしょう？」

二人の事を知っている事もそうだが、俺の事を普通に『ユキ』と呼んだ事にも驚いた。

「いや、えつと。なんで、そんな事まで……。いつから知ってるの？」

「昨日の夜。突然家にやって来て、未来から取材に来たなんて言うんだもん。びっくりしちゃった」

あいつらは一体何をしてくれてんだ。言っちゃいけないんじゃないのか、未来の事は。

「しかもユキちゃんが主役の番組を撮りに来たって言うでしょう？はじめは信じられなかったんだけど、二人が真剣に話すのを聞いてたら、信じてもいいかなって思ってた」

「あいつら、なんで俺を取材に来たかって、言ってた？俺には何にも教えてくれないんだ。ただ、番組に出演してくれて言うだけで」

「うん、聞いたよ？」

俺は初めて自分から一步二カ子に近づく。そして、乗り出すようにして問いかけた。もしかしたら、これから起こる事が、分かるかもしれない。

「……なんでだつて、言つてた？」

「ユキちゃんがオタクだからだつて」

「なっ……！？ あいつら、そんな事言つたの！？」

ニカ子は平然と、うんと頷いた。

俺は顔が赤くなつていくのを感じた。ニカ子に、俺がオタクだと知られていないとは思っていない。かといって、オタク呼ばわりされる事を、嬉しく思っている訳でもない。俺のいない所で、オタクだなんだと噂されていたと思うと、心拍数もあがる。

「……どうしてニカちゃんとこに行つて、そんな話したんだ……」
まずは、そこだ。なぜニカ子にこの話をわざわざする必要があるんだ。

すると意外にもニカ子はニツコリと白い歯を見せて笑つて話した。

「ユキちゃんに『ニカちゃん』なんて呼ばれたの、久しぶりだ。今はみんな、ニカ子つて呼び捨てだから。……なんか照れるな」

小さい頃は、そう呼び合っていた。癖で何も考えずそう呼んでしまった。俺はぎこちなく笑う。

「なんかね、私にも協力して欲しいって言われたの」

「協力？ あいつらに？」

「一緒に番組に出演してもらいたいから、出来るだけ側にいてあげてくれないか？ って」

「ニカちゃんも出演依頼されたの！？」

「うん。でも、私もユキちゃんも、最近ちよつと離れてたじゃない？ 幼なじみではあるけど、挨拶もしないでさ……」

「うん」

「そう言つたら、今日一緒に帰ろうつて誘つてみたらって、真紀緒ちゃんに勧められて。それがいいかなつて思つてさ」

なるほど。だから真紀緒も、事情を知つてて先に帰つたつて訳か。
「それで、ニカちゃん、出演承諾しちゃったの？」

ニカ子は、眉毛をきゅっと上げて、口をとんがらせて言う。

「当然でしょ」

男の俺よりも男らしい、うじうじ考えない潔さ。これだ、俺の知っているニカちゃん。

それに、とニカ子は続けた。

「ユキちゃんだけじゃ、きつと視聴率上がらないわよ」

ちようど家の前に着いた所で、ニカ子は、なんてねー、と笑いながら高らかに手を振り、走っていった。しなやかに束ねた髪を揺らしながら。

俺の周りでも、俺の知らない所でも、着実に何かが動き始めている事を肌を感じながら、足取りも重く自分の家の玄関に向かって行った。

第七話

その後の数日は思いのほか、ただただ普通の毎日だった。何か大きな変事があるものと身構えているからそう感じるのか、普段よりも普段らしい日々で、かえって不思議な感じがしてしまう程だ。

俺は心配になり、家にいた晶に聞いてみた。こんなに平凡な一般人の変化のない毎日を映していて、番組として成り立つのか、と。

晶は、あっけらかんと言いつた。

「ドキュメントを作る中で一番欲しいのは、普段の姿。わかる？ なんでもない日常が、一番面白いの！」

晶にこれだけはつきり言われると、そんなもんか、と納得してしまふ圧力を感じる。年齢こそ俺より二つ下だが、年上から諭されているような感じだ。年の差よりも、人生経験の差、というところか。とにかく、ディレクター様から、そのままでもいいと言われるので、俺も二カ子も、学校ではその後も今まで通りの日常を送っている。

変わった事と言えるのは、二カ子と俺が、学校への行き帰りにたまに会話を交わす様になった事くらいだ。それも、

「今日なんかあった？」

「別に。二カちゃんは？」

「何にも。いつもと同じ」

くらいなものだ。

毎日同じ学校に通う真紀緒とは対照的に、晶はいつも家にいる。編集に時間がかかり、寝るのもままならない、と嘆いていたりするが、ひとつ気がかりだ。

「晶さんは、学校行ってることにしないでいいんですか？ うちの母親には、なんて言い訳してるんです？」

見ちゃダメだと言われるので、よくは見えないがこの時代のものではないらしい半透明のノートパソコンの様なものを膝に抱え作業をしつつ、そこから顔を離さずに答える。

「アメリカンスクールは、いま長い休みだつて言ったら、信じてくれたみたいけど？」

ああ。うちの母親の一番弱そうな言葉だ。「英語」や「外人」という言葉が出てくると、鼻っから自分には理解できないものだと拒絶反応が出る。苦手意識が邪魔して、それ以上の話を受け入れなくなってしまうのだ。それなら、必要以上に突っ込まれることもないだろう。うまいところツイたもんだ。

この二人が我が家にやってきて来てからというもの、どれだけ気を使う事になるか、と案じていたが、気を使っているのは俺よりも真紀緒の方で、晶の世話から家の手伝いまでそつなくこなしている。家族の生活リズムを邪魔しないように誰よりも早く起き、誰よりも遅くまで起きているようだ。そのお陰で、俺にかかるストレスはほぼゼロと言ってもいい程。加えて、かわいい女の子の世話をするのが余程楽しいのか、母の機嫌もすこぶる良く、俺への風当たりも皆無だ。

「ありがたいもんだ」

つい、口から出た言葉にたまたま居合わせた晶が反応する。

「ん？ 何が？」

「いえ、なんでもないです」

ふーん、と晶は両手を上に思いつきり伸ばしていた。そんな晶をその場に残したまま、俺は二階にあがろうと廊下に出る。

「ねえ」

晶が後ろから呼びかける。

「もう寝るの？」

俺と関わるのは、基本的に真紀緒が担当し、あくまで晶はカメラから送られた映像にしか意識を向けていない。そんな晶が、直接俺に質問を投げかけて来たのは、初めて会った日以来だ。

「いや、まだ早いし、明日は休みだし、部屋でゲームでもやるのかなと……」

そう言えば、晶が初めてこの家に来た日、俺の部屋に入るなり、

かなりのオタクっぷりを発揮していた。あのときは、パニックつていたので話は流れてしまっていた。

「私も、見たい！ いい？」

数段階が上がった俺を、下から見上げる晶は、より小さく見えただからか、かわいらしく見えた。まるで、近所の小学生が、遊んでくれ、と頼みに来ているように。

「じゃあ、ちよつとだけですよ？」

また自分の部屋に入れるのは、確かに気まずい。でもそれより、あそこで断って晶をがっかりされるのが、とても嫌だと感じたのだ。それに、自分の趣味に、肯定的に興味を示してくれるのは、手放しに嬉しいから。

相変わらず、俺の布団は絨毯感覚と言わんばかりに、ズカズカと踏んづけている晶は見えない事にして、俺はいつもの定位置に座り込んだ。箱に入れてあるゲームソフトを適当に引っ張りだし、座布団の横に広げてみせた。

「どれやります？ 二人で対戦できるやつやりましょうか？」

晶はこの前同様、掛け布団の上にペタンと座り、部屋の中を物珍しそうな顔をして見ている。

「どうして、ユキ君はこういう世界が好きになったの？」

ゲームの攻略本や、アニメの原作の漫画などがしまっている本棚に気を取られながら、晶は聞いてきた。

「どうして、ですか……」

「この時代、ユキ君の年代の男の子なら、まだ殆どが、ファッションや恋愛や音楽に興味を持っているでしょう？ それなのに、なぜユキ君は、この世界に惹かれたの？」

ゲームのパッケージを片手で弄びながら、どう答えればいいか悩む。結局のところ「気がついたらなった」って事なのだが、そう言うのはなんだか無責任な答えになってしまいそうで、いい表現がないか脳内を漁る。

「俺が……一番欲しかったものだから、だと思います」

部屋のあちこちをきよろきよろしていた晶の目が、ゆっくりこちらに向けられた。

「なるほど。『フューチャーワールド』」

「は？」

「ゲームの事。それやった事ない」

「あ、ああ。じゃ、これやりますか」

俺なりに考えた返事はあっさり流されて、晶はこれから始めるゲームの説明書を楽しそうに読んでいる。俺もそんな話を続けられてもどもるだけなので、すすんでゲームの準備をする。難易度を決めたり、自分のキャラの名前や容姿を決めたり、そんな事をしてっていると、自然に話題もできるし嫌な間が開かないで済む。

「そう言えばこの前、『アトリエ・A』の作品は、なんとかに全部あつたって言つてましたよね。なんでしたっけ。えっと……」

「クラシック？」

「ああ、そうそう、そのクラシックって何ですか？」

晶はまだ、自分のキャラクターの着る洋服を決めかねていた。待たされていた俺は、なんとなくその事を聞いてみた。

「簡単に言えば、古いゲームを集めたベスト盤みたいなものかな。クラシックっていうのは、それぞれの年代ごとに発表されたゲームをまとめたソフトの名前で、今二〇〇〇代のはフリーソフトになつてゐるからみんな持つてゐるの」

「フリーって事は、ただで出来ちゃうんですか？」

「まあね。百以上のタイトルが入ってるけど、私はアトリエ・Aのは全部やった」

いい時代だ。限られた小遣いの中で、ゲームソフトやDVDに出る行く金額は非常にでかい。時代が違うとはいえ、羨ましいと思つてしまう。

「晶さん、ゲーム好きなんですな。嬉しいです、女の子なのに、俺の好きなゲーム知っててくれたし」

ピコピコと動いていた画面のアイコンがぴたつと止まった。

「どうしました？」

「うつん……私がゲーム好きって事も、珍しいことなのよね」

俺は晶が何を言っているのか理解できず、そう顔で伝えたが、また画面に釘付けの晶は、そんな俺に気づきはしなかった。

そしてその有耶無耶も、ゲームが始まると頭の片隅にもとどまる事はなかった。

「おっと、もうこんな時間だ。結構やったし、そろそろ寝ますか？」

操作の仕方を間違っていた最初の一回以外、やり込んでいた本気の俺に勝ち続け、夢中になっている晶に言う。知らないうちに大分時間が経ってしまった。

「まだまだ大丈夫！ もう一回！」

未来ではやり手のディレクターで、ここには仕事で来ているとはいえ、晶はまだ十四歳である事には変わらない。楽しい事に心を奪われる年頃のはずだ。

「じゃあ、もう一ステージやったらおしまいでいいですか？ あまり遅くなると、明日きつくなりますよ」

俺に提案に、まだ不服そうにしながら晶は言う。

「だって、明日お休みでしょう？ 構わないじゃない。私は平気。

仕事でよく徹夜もするもん」

「はあ……でも、明日は出かける用事もあるので」

「へー、どんな用事？」

明日は日曜日。草哉とあのオフ会に顔を出す予定の日だ。

「ちょっと……友達と遊びに」

「遊びにつて、どこに？」

俺は草哉から送られて来ていた携帯のメールで確認しながら答える。

「えーっと、秋葉原、です」

ガタンと、持っていたコントローラーを床に落とし、口を半開きにして俺の顔を晶は見つめている。俺はその音に驚き携帯から顔を

上げた。

「ど、どうしました？」

「秋葉原って、あのアキハバラだよな？」

「あの秋葉原って言われても、どのアキハバラだかわかりませんけど……電気街の、です」

「行く！　一緒に行く！」

膝下をバタバタと動かしながら、顔一杯に広がる笑顔を見せる。

「いや、でも、友達もいますし、行く所もあるんで……また違う日じゃダメですか？」

「なんで！　ちよつとだけでいいからさー。いいじゃーん」

大げさに不満を漏らす。こんな時だけ、子供を全面アピールだ。

「別に俺と一緒になくても、行つて来たらいいじゃないですか。真紀緒さんも明日は学校休みなんですから」

晶は目を細めてじろりとこちらを睨んだ。

「それが出来れば頼んでないわよ」

珍しく歯切れの悪い話し方をする晶は、口をひん曲げてそっぽ向いてしまう。その様子をみて、俺はピンときた。

「わかった。俺の取材って名目で、秋葉原観光したいって事じゃないですか？」

体を反対に向けてはいるが、図星と言わんばかりに肩が一瞬上下に揺れた。

「仕事で来ている以上、自分の意思で出かけたりできないって事なんですな？　ははん。まあ、いくら遊びに来てるんじゃないとはいえ、自由に行きたい所にも行けないんじゃない、ちよつとつまらないですな……」

晶は鼻から息を吐きながら、ゆっくりこちらに向き直った。

「仕事で来てるんだから、しょうがないけどな」

言っている事は、どこまでも大人びているが、表情も声も、縛られる煩わしさが漏れている。こんな事は本人には言えないが、かわいそうに思えたというのが本音だ。

「早く、寝ましょう。明日、起きれませんよ」
ずっと見せて来た、営業スマイルではない、素直な笑顔を初めて
その時見せてくれた。

第八話

草哉とは現地での待ち合わせにしろ、約束の三時まで、という事で、晶と真紀緒を連れて秋葉原に向けて午前中に家を出た。

「いつの間に二カちゃんまで誘ったんですか……」

駅に向かうまでの道のりで、後ろでは若い女の子が集まったとき特有の甲高い声が聞こえていた。

「来ちゃまずかった？」

明らかに意地悪で二カ子は言う。

「そんな事言つてないって……」

三人で勝手に行きたいところに行ってもらっていれば、俺は時間まで着いて行くだけでよさそうだ。逆に俺があちこちをつれて回る手間が省けたというものか。俺は珍しくポジティブな考え方ができた。

大騒ぎで電車に乗り込み、周囲の視線を集めた訳だが、その殆どは、年頃の女の子の習性と諦めた顔を見せていた。が、若い男達だけは、三人三様の容姿を持つ彼女達に色めき立っているようだった。俺は、恥ずかしいあまりドア一つ分の距離を取って、その様子を見ていたが、改めて見ても色々な意味で目立つ三人だな、としみじみ思った。

晶と真紀緒は、まず降り立った秋葉原の街並を一望し、歓喜の声を上げた。

ちょうど日曜と言う事もあり、大通りは歩行者天国として解放され、ますます観光モードを盛り上げた。我ら観光ツアー御一行のお客様達は、街の中心でもある巨大なビルが所狭しと並ぶ大通りはもちろん、掘り出し物を探す人達で溢れる細い路地にも入り込み、おもしろグッズを見つけては喜んでいた。俺も秋葉原はたまに来るし、ちょっとしたお祭りのような休日のこの街は嫌いではない。楽しそうにしている彼らのお守役として来てはいるが、悪い気はしていな

かった。

どんな味がするのか、というので路面販売しているたこ焼きを買い、店の前であつあつを頼張らせた。苦戦しながらもおいしそうに食べている三人を見ている所に、ポケットに入れてある携帯がメールの着信を知らせた。見ると草哉が到着したらしい。

「ニカちゃん、悪いけど二人をお願いしていいかな。草哉が待つてゐるからそろそろ行かないと」

ほふほふと息を吐きながら、顔を上向きにして返事をする。

「まかへてー」

そう言いながら、左手の親指と人差し指で丸をつくって見せた。晶も真紀緒も事情は分かっているからか、軽く挨拶だけしてまたすぐにたこ焼きに夢中になった。

彼らを後にし、草哉との待ち合わせ場所の駅前に歩き出したが、もう少し引き止められるか、一緒に行きたいあの言われると構えていただけに、肩すかしをくらったみたいに、寂しいような気分になった。なんだかんだと俺も楽しんでいたのかも知れないな、と考えていたら、草哉の姿を見つけた。

「お、来たな」

側に寄つてきた俺に気がつく、草哉は耳にはめていたヘッドフォンを外しながらそう言った。

「んじゃ、行きますか」

「うん。それで場所はどのへんなの？」

早速歩き出した草哉に続いて俺も歩き出す。

「遠くはないよ。まあ、ついて来て」

そう言う草哉に暫く着いて行つた先は、結構な古さの雑居ビルの並ぶ通りだった。賑やかな大通りからは大分外れ、辺りには、露店のように売りものを道路に広げた外国人の姿が目立つ。怖い噂話をよく聞く場所なので、いつもはあまり近づかないようにしていた地域だ。軽くこわばっている俺をよそに、草哉は慣れているのかまっすぐ目的地に進んで行く。そして、一つの雑居ビルの入り口に吸い

込まれる様に入って行つた。

「ここ？」

薄暗いエレベーターホールで、上ボタンを押して持っている草哉に聞く。すぐ後ろにむき出しで階段があり、人が三、四人も来れば身動きが面倒になるような狭いところだ。コンクリートの壁なので、風呂場の様に話す声が反響する。

「そう。六階。だいたいいつもここだな。他の所には行つた事ないや」

すぐ横にある壁には、このビルに入っているテナントの名前を埋めるように枠が全八階分用意されてある。しかし。その内ちゃんと会社名が入っているのは二階の同人ビデオの制作会社だけで、他は空いているのか、ただ案内が出ていないだけなのかは分からない。当然、六階も何も書いていなかった。

のんびりとしたエレベーターがやっと一階に到着したちょうどその時に、一人、同じ目的であろう男の人が後ろから、一緒に乗り込んだ。

「お、御門君。あ、もしかしてこちらが、お友達？」

「あ、ルーフェスさん。そうなんです、友達の田中雪広です」

金属の摩擦音を派手にならしながらエレベーターの扉は閉まり、狭い空間に三人がいた。

「どうも、田中です」

ニコニコと笑うそのルーフェスさんという人は、二十代後半から三十代くらいなの、こう言つては失礼かもしれないが、とてもふくよかな方で、笑うと眼鏡が頬にめり込んでしまう。体格のいい人は、時に年齢や特徴が分かりづらい事があるが、ルーフェスという名前から想像できる外国の方ではなさそうだ。簡単に言えば、見るからに日本人。

「今日は楽しんで行つてね。ところで、いま後ろで隠れていた女の子三人も一緒じゃないの？」

「え？」

六階に到着し、エレベーターから降りながらルーフェスは話を続ける。

「今、僕がこのビル入って来る時、外から君たちを覗いている三人の女の子がいたから。知り合いかなって思ったんだけど」

俺は一瞬で心臓から大量の血液が体中に放出されるのを感じた。あいつらだ。やけにあっさり俺を行かせたと思ったのは、はじめから後を着いてくるつもりだったんだ。

「すいません、俺ちよつと外見て来ていいですか」

まずは腹が立った。でもすぐに、このままほっとく事もできないと思った。さっき通ってきたような怪しい通りを、あの三人だけでウロウロさせられない。声を掛けられるくらいならまだいい。もしも、悪い人達に連れて行かれてもしたら、いくらスポーツ万能の二カ子いるとはいえ、どうにかなると思えない。

「ユキ、誰のことが知ってるの？ 知り合い？」

「もうすぐ始まる時間だけど？」

俺は、一度下まで行ってしまったエレベータを呼び戻す為に、下へのボタンを押しながら答える。

「ちよつとその辺を探してみます。すぐ戻りますんで。草哉、悪いな、ちよつと心当たりがあるから、急いで行ってくる」

エレベーターが到着し、扉が開くのを待ちきれずに乗り込もうとすると、中には乗客がいて危なくぶつかりそうになる。

「あつ、すいませ……。あああああ」

「ユキちゃん！」

まさに、その三人だった。

睨みつける俺の視線をかくくぐる様にして、三人はせつつく様にエレベーターから降りて来た。

「こんなところで、何してるんです！」

だいたい、この計画を発案した元はわかっている。その容疑者を特に睨みつけると、その隣から援護が飛び出した。

「申し訳ありません、田中さん。悪い事だとは知りながら、後をつ

けるような真似をしてしまいました。お気を悪くされたとは思いますが、どうか寛容に……」

「ごめんね、ユキちゃん。きっと、御門君とメイド喫茶でも行くんだろ？から、後からついて行っておごってもらおう、って……。冗談のつもりだったの、でも、ごめん」

「ごめん！ ユキ君なら、絶対気がつかれないと思って……つい」

「晶D！」

「あ、いけね」

正直者すぎるのも、かえって状況を悪化させるというお手本だ。呆れてもう、怒る気にもならない。しかめっ面をして三人が肩を窄めて謝る姿を見ていたが、急におかしくもなってきた。

「もついいですよ。とにかく、この辺り、あんまり治安よくないみたいですから、女の子だけでは心配です。俺はちよっここで用事があるし。どうしようかな、待っててもらえます？ 時間どのくらいの予定なんだろう」

そう思っ、草哉の姿を探そうと振り向くと、ルーフェスがすぐ側で笑顔で見ていた。

「いいじゃない、彼女達にも参加してもらえば」

「いや、でも、いいんですか……？」

「女の子なら、何人でも大歓迎さ。それに、どこかで待たせているよりも、安心でしょう？」

「そう言われればそうだが。」

「先に行つてますから、来るなら受付で名前だけ書いて下さい。草哉君ももう、待ってますよ」

そう言い残し、ルーフェスは重そうなグレーの鉄のドアを開けて中に消えて行つた。不思議そうに中を覗き込もうとしていた三人は一同に俺を見る。

「田中さん、勝手に着いて来ておいてなんですが、一体何が始まるんです？」

「俺も実はよくわかってないんですけど。ゲームとかアニメとかが

好きな人たちの集まりらしいです。どうします？ 飛び入りで参加してもいい、って言うてくれてるんですが」

晶は問題なさそうだが、他の二人はそういう物に興味があるところか、嫌悪感があつたりしたら辛いだろう。逆の立場から言っても、そんな目で見られたくない。

「真紀緒もたしか大学の専攻は、近代アニメ文学じゃなかったっけ？ いい勉強になりそうじゃん」

「ええ、楽しみです。ぜひ参加させてください」

「そ、そんな学科があるんですか……？」

なんだか、この二人から垣間見える未来が、どうなっているのか心配になるが、今はいいとしよう。

「二力ちゃんは……？ 嫌でしょ？」

嫌だとも言いづらいだろうし、かといってはつきりキモイと言われるのもまた辛い。無理やりっていうのも、気が引ける。

「超興味ある！」

「え？」

「私、ゲームもアニメもあんまり知らないけど、少年漫画ならたくさん読んです。でも、なかなか女の子には話の合う子もいなくて、そういうのが好きな人もきつというでしょ？」

俺は、多分、と頷いた。

「なら、決まりー」

そう言ったのは、俺ではなく晶だった。待ちきれずに真紀緒を連れだつて、さつさと奥へと続く扉を開けている。

俺と二力子は顔を見合わせて、少し笑った。

「晶ちゃんって、すごく大人に見える事もあるけど、やっぱり年下だなんて、思った、今」

そう言つて二力子は優しい顔を見せた。

「二力ちゃん、漫画なんて読むんだ。知らなかった、しかも少年漫画なんて、いつから？ きっかけは？」

白いタイルを敷き詰めた、シンとした空気のエレベーターホール

には、二人のスニーカーが鳴る音が響く。二カ子はドアの取っ手を握りながら顔だけこちらを見て言う。

「昔っから。ユキちゃんの影響だよ」

ぼかんとする俺をよそに、二カ子はそのまま、薄暗い会場に入っ
て行った。

そこは、ただっ広い空間で会議室とも、小ホールとも言えるような場所だった。広さは学校の教室と変わらぬ程度。右側一面は窓があるが、遮光カーテンらしき黒い布で覆われている為、ほとんど日光は入っていない。カーテンの隅から溢れた光と、正面に置いてある大きなホワイトボードに当てられたライトだけで、この部屋はうつすら明るいだけだ。中には二十人前後の人影が見える。暗いし後ろ向きで座っている姿では、どんな感じの人なのかは分からないが、殆どが男性のようだ。

ひとしきり中を見回して、入り口のすぐ脇に置いてある、小さめの机があるのに気づく。上にはノートが開かれ、机からぴらっとた
らされた白い紙には、『受付』と書いてある。

「ここに名前書くみたいだ。書いておくね」

「うん、お願い。暗くてよく見えないな、晶ちゃん達どこいったんだろっ」

ノートには、草哉の名前が最後に書いてあり、俺は自分の名前とおまけの三人の名前をその下に書いておいた。

そのとき、部屋中がにわかに沸き立った。すぐに拍手があちこちから鳴り始めた。

「なんだろっ？」

二カ子も驚いているようで、首を右左に動かしている。

「始まるのかな。そのへん適当に座っところ」

「うん」

俺たちは、部屋の一番後ろのから何が始まるのを待っていた。すると、前方のホワイトボードの後ろから、一人の女の人が現れ

た。途端に、部屋の観客から、おおおお、と声があがった。

「みんなー、こんにちはー！ 今日も集まってくれてどうもありがとうございます。みんなのシユウです、今日もよろしくね」

マイクを持ったシユウと名乗るその子は、アイドル顔負けの甲高い声で顔の横で手のひらをくると振りながら、あっちにこっちにと視線を振りまいていた。着ている服も、フリフリのレースがついている裾の広がったミニスカートと、丸いエリのやつぱりフリフリの半袖ブラウスという、何かの衣装とも思えるものだ。今まで静かだった会場が、一気に盛り上がる。歓声や、ざわめきも控えめながら、続いている。

「アイドルか何か、かな？ ユキちゃん知ってる？」

隣のパイプ椅子に座っている二力子が顔を近づけ、小声で聞いてきた。

「いや、わからない。多分、ネットアイドルか、地下アイドルか何かじゃない？」

「地下アイドルって、秋葉原とかに多い、マイナーなアイドルのこと？」

「そうそう。地下の小さいスペースでライブとかをやってる、地道なアイドルの事。たぶん、そのどっちかじゃないかな」

アイドルオタというカテゴリも、もちろん今でも健在だ。しかも最近は、大手事務所で大々的にテレビやグラビアで活躍するアイドルを応援するよりも、もっと身近な存在を売りにする、ネットや地下のみで活躍する女の子達を応援するオタの方が多いかもしれない。オフ会と聞いて来てはみたが、本当はこのアイドルの交流会なんじゃないだろうか。出来るだけ観客を増やし、盛り上げる為に俺も呼ばれた、と。

「草哉め……」

「ん？ 何？」

「い、いや、なんでも……」

俺は、アイドルオタでも、コスプレ萌えでもないって知っていて

連れて来たって訳か。だから、今日の事をなにも詳しく話さなかったんだ。あいつ……。

普段知り合えないような、年や環境の違う人達と、もしも趣味の事で話が盛り上がったら楽しいかもしれない、とこっそり楽しみにして来た俺は、がっかりしたのと、利用されたような気がして、途端にテンションが下がった。

前方では、シュウと言う子が、最近あった事、なんていうテーマをホワイトボードに書き出して、飼っている愛犬のドジ話を披露している。わざとらしい表情も、大げさなアクションも、目当てに来ている人には悶絶もののなのだろうが、一步離れて見ている側にしてみれば、何がいいのか理解できない。

しかし、俺はそんな人達を否定する事も出来なければ、否定しようとも思わない。俺の趣味だって、立場が変われば人から気持ち悪い、なんでそんなに夢中になるのか、外に出る、と蔑む人達もいる。いい気分はしないが、そういう人とは考え方が違うのだ、と割り切って自分の好きな事をしてる以上、やはり『オタク』は『オタク』同士、認め合い、譲り合っていくのだろう。だから俺は、否定はしない。

しかし、かといって一緒に楽しめるかどうかはまた別問題。せっかくの日曜、さっきまではなかなか楽しい休日だったのに、ぶち壊された気分だ。草哉を探し出して、今日はお暇すると伝えよう。

それにしても暗い。草哉どころか、目立ちそうな晶と真紀緒も見つけられない。

依然騒がしい舞台に見立てた部屋の最奥では、今度はシュウが声優を勤めたという、オリジナルビデオアニメを上映すると言って、盛り上がっている。ホワイトボードの後ろから、大画面テレビが引っ張りだされて来ていた。この暗がりはその為だったのかとようやく分かったのだが、今やどうでもいい事に思えた。

上映が始まり、オープニングの可愛い歌が流れている。シュウという女の子には、さして興味はないが、アニメに関してはさに

あらず。どんなキャラなのか、どんな作画かとやはり気になり、ちらりと画面を見てしまう。

嫌いではない。独創性に欠けているとも言えるが、最近ではよく見るタイプの典型的なアニオタ好みのアニメだ。メインらしい三人の女の子キャラは、清楚系、ボーイッシュ系、天然系と、タイプは違えど、目が大きく魅力的に描かれている。シユウというアイドルが好きでも、アニメ自体が好きでも、萌え要素あり、という感じがそれでも、俺の冷めた気持ちは変わる事もなく、どんなものかを見定めたらもう用はない、と草哉を探し始める。

心持ち腰を浮かせて、前傾姿勢になったりしながら、前に座る人たちの顔を見える限り確認しようとするが、なかなか見つからない。関係ない人を、あまりジロジロと見ていると気を散らしてしまっただけだし、困ったなと思いつつも目だけは動かしていた。その時、じわじわと異変に気がつき始めた。

座っている人たちの前方に回ってはいないので、顔を正面から見ているが、横顔を見る限りでもそれはわかる。

なんか……イっちゃってないか？

全員がそうなのは、全て確認してないのでもちろん分からないうが、俺から見える範囲の人は皆、画面に異常なまでに喰いついている。目を皿の様に丸く見開き、大体口が開いている。笑っていたり、顔つきが変わったりするでもない。ただ、まっすぐに画面を見入っているだけ。

相当このアニメが好きで、瞬きするも惜しんで観ているのではないかと見えるが、どうもそうではない。楽しんで観ている様子ではないのだ。

このアニメの何がそんなに……。

そう考えながら画面を観て、また気づく。

まだオープニングの音楽だ。

大体アニメのオープニングなんて、一分か二分くらいだ。もしもわざと長く作ってあっても、もう始まってから五分以上は経ってい

る。

あれ？

俺は気づいた。

さっきと同じ映像だ。全く同じ。

アニメのオープニングを繰り返している？

妙だ。本編が全く始まらない。

それでも……誰も不思議がっていない？

俺は異様な雰囲気の間を見回しながら、二力子に聞こえる様
に言う。

「二力ちゃん、なんかこのアニメ変じゃない？ それに観てる人も
ちよつと不気味な感じ……二力ちゃん？ 聞こえてる？」

俺ははつとした。二力子の目は、周りの人の目と同様に画面を観
たまま動かない

「二力ちゃん！」

肩に手を置いて揺すっているのに、気づいているのかいないのか
わからない。

大画面から浴びせられる白い光に浮かび上がる二力子の横顔は、
まるで自分の部屋にいる俺自身を見ているよう。胸がちくりと痛ん
だ。

「ユキ君！」

突然後ろから声を掛けられて俺は飛び跳ねるように驚く。

「晶さん、真紀緒さん！ どこにいたんです、全然見えなくって」
どうやら探していたのは、こちらではなかったようだ。

「ユキ君、止めて！ このアニメの上映、早く止めて！」

二人は揃って神妙な顔つきで、俺に何かを訴えている。
「止める？ 上映を止めるってどういう事？」

晶と同じくらい動揺しているはずだが、真紀緒はどこまでも冷静
さを欠かさずに答える。

「理由は言えません。また、私たちが、歴史を変える行動をする事
も、絶対にはいけない事です。しかし、見て見ぬ振りをすると

は、教則本には載っていません」

まだ意味を理解できずに、二人を見上げる俺の横で、晶が気づく。
「二カ子ちゃん！　ねえ、二カ子ちゃん！？　まさか……」

晶の言う『まさか』の後に続く言葉を、知る術はないが、異変である事には違いないと確信する。なぜなら、いくらアニメが上映されていて音楽が鳴っているからといって、これだけ大声で騒いでいるのに、誰一人こちらを振り向かないなんて、不自然すぎる。

「田中さん。混乱されているのは重々お察しします。お聞きになりたい事もあるでしょうが、お願いします。二カ子さんや御門さんの為にも、あの映像を遮断しなくては、取り返しのつかない事に」

「ユキ君、お願い！」

とにかく、この二人の言葉を信じない理由はなかった。テレビから流れる映像を止めるなら、電源を消せばいいのだろうが、リモコンが手元にあるわけでもないし、第一ボタン一つで消したところで、またすぐに再開されるだけだ。どうか、少しの間でも修復不可能にするには？　こういうトラップや作戦系のゲームは好きだが、まさか自分がその当事者になるうとは思ってもいなかった。

心配そうな顔で見守る二人を押しつける様に、俺は外に飛び出す。

「ちよつと、ユキ君！　どこ行くの？」

「まさか田中さん、逃げたのでは……」

「そんな……」

俺には、読者、いや、晶たちの番組の視聴者をあつと驚かせるようなとんちの効いたトリックなんて考えつかない。それは、ちゃんとしたフィクションのお話で楽しませてもらって欲しい。申し訳ないが、俺なんて、所詮このレベル。ただのオタクですから。

飛び出した先のエレベーターホールをぐるっと見回す。身長より上を重点的に探すが、ない。同じようなビルを思い出しながら考える。

よくあるのは、もう一カ所、あそこだな。

目の前のエレベーターを横切り、その奥の階段を駆け下りる。飛

び降りた、小さな踊り場にそれはあった。

白塗りの壁に向かって立ち、その中央に構える濃いグレーの鉄製の小さな扉を開ける。そう、配電盤だ。

「普通でごめんなさい」

誰に謝っているのかわからないが、一人ごちながら、『六階ホール』と古いシールの貼つてあるスイッチを下に倒す。

同時に、遠くの方でいくつか機械音がしたのを確認し、急いでまた六階まで戻る。勢い良く扉を開けると、予想通りまだ何事かと茫然とする人達ばかりだった。

「ユキ君、逃げてなかった！」

「つていうことは、今の停電は、田中さんが？」

窓際まで行き、カーテンを腕の届く限り一気に開く。当然、遮られる物のない日光は勢い良く暗闇を押しつけていく。

それでも呆然と座っていた参加者達は、動きだそうとする事もしない。

「ニカ子ちゃん、わかる？」

晶が呼びかけている。俺も心配になり、駆け寄る。

「初めてなら、そこまで深くはないはずですよ……」

真紀緒も心配そうにニカ子の肩を叩く。当のニカ子は、もう何も映し出されていないテレビ画面に、まだ視点が刺さったままだ。

「どうしよう。ニカちゃん、どうなるんです？ 大丈夫なの？」

「私たちも分からない。でも、なんとかここから連れ出さないと……」

……

「ここから出すだけでいいなら、なんとか俺が……あ、でも草哉」

日差しの入った部屋で草哉を探し出すのは簡単だった。一番前の席の一番壁側の椅子に座っていた。

「おい、草哉」

後ろから肩を叩きながら、前に回る。すると、ぐらっと上半身が倒れかと思ったら、左の壁に頭をぶつけてそのまま止まった。

「おい！ 草哉、大丈夫か？」

顔を見ると、目が半分開いたまま、でも反応は寝ているのと同じ。返事はしないが、息はしている。一目見て、異常であると感じる。

「どうしちゃったんだよ、草哉！　おい、おい！」

真紀緒が俺の声を聞き、様子を見に来た。

「どうですか、御門さんは……。やはり。かなり重度ですね」

「重度……？」

いえ、とだけ言う真紀緒は、それ以上の質問をしないでくれ、と無言で伝える。

「どうしよう、草哉を置いては行けないし、でも、晶さんと真紀緒さんだけでは、二カちゃんは無理だし……」

こうしている間にも、隠れて姿を見せていない主催者側が、また映像を流し始めるかもしれない。また真っ暗な部屋に戻されたら、動きもとらずらくなる。とりあえず、ここを出ないと。

どうする。

その時、後方にいた晶が驚嘆する声が聞こえた。

「代表！」

振り向いた先の代表と呼ばれる人物は、この場にいることが信じられない人だった。

第九話

「父さん!？」

「早く出るぞ、俺の姿を見て驚いて飛び出して行つたが、いつまた戻ってくるかわからん。雪広、お前は二力ちゃんを頼む。俺はその友達を運ぼう」

目をパチクリさせている俺を見て、苛立つ父の声が響く。

「驚くのもいいが、まずは外だ。さっさと動かんか」

「う、うん」

軽々と草哉を担ぎだす父の後を追うように、晶と真紀緒の手を借りながら、二力子をエレベーターに押し込んだ。

一階まで着くと、来た時にはなかったワンボックスの車が停まっていた、父はその車の後部ドアをがらつと開けた。少々乱暴に草哉を座席に放り投げた。

「とりあえずここに寝かせておけばいいだろう。二力ちゃんは、こっちに座らせてやりなさい」

「あ、ああ」

なんとか体を車体に乘せて、引つ張る形で二力子も席に収まらせた。

「よし、じゃあみんな、とりあえず、乗れ」

晶も真紀緒も何も言わないまま、後ろの空いた座席に乗り込む。必然的に俺は、助手席に座る事になった。

すばやく車は動きだし、いまさっきまでの日常と断絶されたような空間から、休日で賑わう観光地、秋葉原へと戻って来た。

わざとなのか、誰も話そうとしないまま、暫くは自宅へと向かう幹線道路を進んでいた。いても立ってもいられず、俺は口を割る。

「なんで父さんがいるんだ? 仕事はどうしたよ」

まっすぐ前を見て運転を続ける父は、顔のどの筋肉も動かさず黙っていた。俺は構わず、シートベルトで動きづらい体を精一杯後ろ

に向けて、聞いた。

「晶さん、この人来た時、なんて言いました？ 代表って言いましたでした？ あれ、どういう意味ですか？」

いつもは歯切れのいい晶が、目をそらした。

「それは……」

「真紀緒さんも、何か知ってるんですよねえ？ いい加減、何が起きてるのか少しくらい教えてくれてもいいんじゃないですか？」

「雪広！」

耳元で大きな声が叫ぶ。

「その二人を問いつめるな。答えたくとも答えられないんだ。知ってるだろう」

変わらずに前を見たままの父は、顔色一つ変わっていない。

「じゃあ、父さんは何か知ってるっていうのかよ。この子達を連れてきておいて、それっきり家に顔もださないで、今までどこで何して……ちよつと待てよ？」

急に事が読めて来た。

元を正せばこの二人をうちに招き入れたのは、この父だ。もしかして、知り合いの娘という話も、元々嘘だと分かっていて、この二人が未来から来たという事も、みんな知っていて……。父は、全てはじめっから知っていたと？

「知ってたの……？ 父さん」

横顔を見つめる俺の目線に、父の喉が小さく動いたのが見えた。

「知ってたんだろう？ 知っててこの二人は家に来たんだろう？」

大きな公園の前の道を通っている時だった。父はゆっくりと車を測道に止め、ハザードを焚く。降りるのではないと、すぐ分かった。期待した事とは違う事を、父は話したず。

「これから話す事は、お前にとって理解することが難しいことだと思ふ。しかし全部本当のことで、事実だと言う事をまず最初に分かってもらいたい」

「なんの話だよ。俺はもう、この二人がどこから来たのかも、何を

しに来たのかも、とづくに知ってるよ。っていうか、教えられたんだけど」

「そこから先の話なんだ、雪広」

久しぶりに近くで見る父の顔は、月曜の朝よりも、さらに疲れているように映った。しかし、その顔は、どこまでも真剣そのものだった。

「そこから先って、何の事だよ。俺が聞いてもいい事なの？」

「代表」

それまで黙っていた真紀緒が口を出す。

「よろしいのですか？ 許可はお取りで？」

俺に向けるそれとは全く違った優しい目で、真紀緒に振り返る。

「大丈夫だ、真紀緒ちゃん。二〇八五年代表と相談をした上で、先ほど組合で許可がおりたところだ」

「安心しました」

なんの話だかさっぱり分からない。それも、父には通じているのがまた謎を深める。

「いいから、説明してくれよ。もう頭がハテナマークだらけだよ」

父はシートベルトを外し、体を緩めてからゆっくり話した。

「この二人がやってきた経緯は聞いたな？」

「うん、俺の取材だって。二〇八五年のテレビ局から来たって。やっぱりそれも嘘なの？」

父は首を静かに横に振る。

「それは嘘なんかじゃない。本当に彼らは二〇八五年から、お前を題材にしたテレビ番組を作る為に来てくれたんだよ」

晶も真紀緒も、黙ってその話を聞いている。

「それじゃあ、その先の話っていうのは？ その前になんで父さんがそんな事を知ってるの？」

「よく聞いてくれ、雪広」

ここで話を一旦切り、クッションを入れて進めた。

「父さんの本当の仕事は、商社マンじゃない。时空管理組合という

組織の、この年代の代表をしている」

「時空……管理組合？」

晶も、真紀緒も父を代表と呼んでいた。父が代表？

「そうだ。時空移動が可能になった二〇四一年に設立された組織で、各年代ごとに一人、時空移動をする際の窓口になる役目の人間が選ばれている。そして、この年代が、父さんだ」

「窓口って、どっかの年代から、その時空移動をして来た人を受け入れたり、送り返したりとかするの？」

「そんなとこだ。この時代で勝手な事をしていないか、何か悪さをしていないかをチェックするのも仕事の一つだ。監視員ってとこかな。世界中に來客が来るもんだから、家にはなかなか帰れない。悪いとは思っているんだがな。おい、これ母さんには内緒だぞ？」

なんだか、スケールのでっかい話と、ものすごく身内の話がごっちゃになっているが、かえってそれが真実味を増した。

「言わないよ。言ったって聞きやしないさ、そんな話」

「その通りだな」

はっはっはと父は笑った。固かった車内の雰囲気が少し軽くなった。

「じゃあ、父さんも未来に行った事があるの……？」

「まあな。定期的に年代ごとの代表者が集まって、報告会というのを開くんだ。いついつ誰がどんな理由で来ましたよ、とか、今度こんな予定があるから、気をつけてくださいね、とか。町内会みたいなもんさ、やってる事はな」

「なんだか、父さんの話聞いていると、たいした事じゃないような気がしてくるよ、ほんと……」

そこに、真紀緒が入って来た。

「でも、代表のお話は、とても要領をとらえた、分かりやすい内容だと思います」

「ありがとう、真紀緒ちゃん」

父は嬉しそうだ。母同様、父も娘が欲しかったのだろうか、明ら

かに俺に対する態度とは違うのだが。

「うん。まあそれでだ。その報告会ってのが、実は昨日あってな、そこで悪い噂を聞いたんだ。それで急いで帰ってきたら、お前達がまさにその最中だったって事で、先ほどに至る」

終わり、みたいな満ち足りた表情をしているが、全くわからない。

「全然説明が足りないよ。もっと詳しく話して」

「お前も知リたがりだなあ。まあ、その為に組合に情報開示許可をもらってきたんだ、ちゃんと話すから、そう慌てるな」

「なんか、代表とユキ君の会話聞いてると面白い」

晶はクスクスと笑い出した。

「晶D、笑ったりしたら失礼です」

と、言ってる真紀緒も面白そうだ。

「詳しく、な。はいはい。いつの時代も便利な物が発明されると、それを利用して悪いことをしでかそうとする輩はいるもんだ。しかも、得てして悪さをしようとする奴らは、ずる賢い頭を持っている。そうだろうか？」

日々伝えられるニュースの中で、詐欺事件や犯罪集団の手口を聞くと、そんな巧みな手口を思いつくくらいなら、その頭脳を真つ当な仕事に反映させればいいのに、と思う事がよくある。そういう事だろうか。

「そう言われれば、そうかも。それで？」

「歴史の改ざんだ」

「歴史の……改ざん？」

「分かりやすく言えば、過去を変えてしまっ、という事だ。時代を行き来する事を利用して、過去を自分の都合のいいように変えて、未来に生きる自分に有利にしていっていくって訳だ」

「そんな。ずりい」

つい、あまり綺麗でない言葉が口をつく。だって、そんな事が出来るなら俺だって、やり直したいことは山ほどある。

「そうだな、ずりいな」

父は口の端だけ上げて笑った。

「父さん達のいる組合では、移動に関して色々決まり事を作ってるんだ。そのほとんど全ては、歴史を侵さない為のものだ」

「未来の事を過去の人に話さない、とか？」

父は頷く。

「そうだ。時は絶え間なく流れ、そして決して戻って来ないもの。

これは自然の摂理だ。しかし、それをあえて乱すのが、時空移動という行為。そのリスクを十分理解し、最低限のダメージで元いる時代に帰ってくる為だ。しかし、今回、それを大幅に乱す行為を行っている年代が見つかった」

「年代？ ってことは、その時代の代表の人もぐるで歴史の改ざんをしようとしてるの？」

「どこの年代です？ そんな馬鹿げた行為をするのは」

真紀緒だった。

「真紀緒さん達も知らないんですか？ この事は」

「うん、今初耳」

晶も驚いている。

「昨日発覚したんだ、年代は二〇四五年。そして、その首謀者は、お前達がさつき見た、シュウという女だ」

「ええええ！」

先ほど見た、フリフリ衣装に、どこまでも高い声。オタク心をくすぐる甘ったれたしゃべり方は、正直知性のかけらも感じられなかった。あのシュウというアイドルが？

「だから、あのアニメにあんなものが？」

「あんなもの？」

それはあの部屋で、晶と真紀緒が必死に中断させようとした事に繋がっていた。

「先ほどのアニメには、非常に高度な技術で作成されたサブリミナル効果のあるメッセージが挿入されていました」

「サブリミナルって、テレビとかで目に見えない短い時間の画像を

何度も見せるってやつですか？」

「そうです。この時代では、ほとんどその効果が上げられるものはないはずですが、近代、人間の潜在意識に直接働きかける、効力の強い手法が見つかっています。法律でも禁止されたのが、確か二〇三八年。四五年の人達なら、違法である事ももちろん知っているはずなのに」

「あれを見たから、二力ちゃんも草哉もこんな事に？」

真紀緒は頷く。

「間違いないでしょう。特に御門さんは、繰り返しこのアニメを見させられていたのではないのでしょうか。かなり、精神的構築部分を壊されているようです」

二力子は今は寝てしまっているようだが、草哉は未だに瞼を閉められず、時折ガクガクと震えだしたりしている。確かに症状は重そうだ。

「でも、あのアニメなら、俺も少しは観てたし、それに晶さんと真紀緒さんはなんで平気だったんですか？」

今度は晶が答える。

「多分、ユキ君はちゃんと画面を見ていなかったんじゃない？ そうでなければ、たぶん引かかっていると思う。だって、あれ、かなり精巧に仕組まれていたもの、プロの仕業だと思う。私たちは、学校でその訓練を受けるの。動体視力を極限まで鍛えて、そういった映像を意識下に持つて来れる。だから、見てすぐに分かった。サブリミナルだって事も、その内容も」

そういえば、始まってすぐに、草哉を探す為に画面そっちのけできよろきよろしていた。そのお陰だったのか。

「その内容って、どんな内容だったの？」

「『クールガムを食べよう』じゃなかったかい？」

突然父が言う。

「ええ、その通りでした、代表」

「ガム？ クールガムって、普通に売ってるあのガムとは違うの？」

父は、いいや、と言ってから続ける。

「その、ガムの事だ。彼らは、すでにそのガムに、ある物質を含ませているという情報がある。その物質を取り込ませたいが為に、わざわざサブリミナルまで利用して、ガムを食べさせようとしている」

「あ」
そう言えば、こここのところずっと草哉が食べているのが、そのクールガムだった。

「どんなものが入ってるの？ 草哉、最近いっつもそれ食べてたよ。ヤバいもの？ 毒とかじゃないよね？」

父の顔は穏やかで、その表情からすれば、命に関わるものではないと暗に感じた。

「基本的に毒物ではない。しかし、外的症状等が全くない分、より悪質なものだと言えるかもしれない」

「それは、どんなものなのですか？」

真紀緒も予想ができない、といった様子だ。

「脳内麻薬物質。好きな事をしていたり、楽しいと思うときに気分がとても良くなり、その状態を維持したいと感じる、人間が元々もっているものだ。あのガムに含まれている量では、もしも一般人が一日に二、三箱食べたところで、いつもより多少趣味に心が踊るくらいだが、この物質が多くなればなるほど、好きな事をしたい、もつとしたい、してない時間が我慢できないという、いわゆる禁断症状に似た状態になってしまう。多分あのサブリミナルには、それ以上を摂取したくなる反応が出てしまうだろう。もしも、継続的に多量の脳内麻薬物質を増やせば、麻薬と同じように、精神的に異常をきたす。わかるか？」

「わかるけど、目的がわからない。そんなものをわざわざオタクを集めて食べさせて、一体なにをしたいの？」

父は珍しく俺の頭をなでた。

「なかなかいい質問だ」

俺は照れ隠しもあり、手を払いのけた。

「いいから、それで？」

わざとおどけた顔をして、その手を引つ込めた。

「そっちの二人には分かると思うけど……」

後ろの座席へ前置きをしてから、父は続きを始めた。

「さっきの部屋にいたのは、世間で『オタク』って言われてる人達だろう。なぜ彼らがオタクを相手にこんな手の込んだ事を、しかも時代を超えてまでしたいと思うのか」

俺には、先がさっぱり読めなかった。しかし、晶と真紀緒には、そこまで聞いただけでなるほど、という事らしかった。

「雪広。よく聞け。これを聞いてお前の将来を決めて欲しくはないんだが、未来の事実でもある。実は、未来では、オタクが世界を握っているからだ」

「……はあ？」

何を言っているんだ。ここまではなんとか氣を確かに聞いていたが、さすがにだめだ。冗談でないなら、ばかにされてるとしか思えない。

「オタクが世界を握っているだああ？」

「本当なんです、田中さん」

「ユキ君、嘘じゃないんだよ」

真顔で話されても困る。まずは頭を整理しないとその先の話が耳から脳に入ってこない。

「分かる様に簡単に言ってやる。今でもそうだが、この世の中、マルチメディアが蔓延して、インターネットや電子機器がなければ成り立たないだろう？ 未来は、これがもつと加速している。朝起きてから、夜寝るまで、もつと言えば、おぎゃーと産まれてから、命の消えるその瞬間、いやその後も、全てがコンピューターの手を借り、なければ成り立たないという世界になっている」

「そうだったとしても、それとオタクがどう関係するの？」

「それは、ある一人のパソコンオタクが、画期的な生活オペレーションシステムのLOPと言うプログラムを考えたところから始まる。

しかし、そのプログラムもシステムも、あまりに複雑すぎて、携われる人間はやはり同じくオタクでないと出来ないものだった。それ程の知識を持ち、お互い理解できるのがオタクだけだったんだ。しかしすぐに、そのシステムが世界基準になってしまった。とても、優れたシステムだからだったからなんだが、それを発端として、徐々にオタクであることがステータスになっていったんだ。まずはパソコンオタクから波及し、今まで日陰でくすぶっていた、各種の分野に膨大な知識をもつ彼らはもてはやされ、実際それがカッコいいとされるようになった。オタクと呼ばれる趣味に、みんな走ったんだ」

「……冗談だろ？」

「冗談なんかじゃない。今でも少しづつその傾向はあるだろう。秋葉原はどんどん再開発がすすめられ、それを文化とするオタク達がいる。世界中に飛び火し、オタクに関わる産業がうなぎ上りで急成長している。理解できないというならば、世界中が秋葉原になったと考えるといい」

世界中が秋葉原……。

楽しそう！ ってそうじゃない。あの一風かわった街が、世界に広がったなら、オタクが世界の中心だ。なるほど。そんな世界なら、晶や真紀緒のような普通の女の子がゲームに詳しくたり、大学でアニメの勉強をしていたりする理由がわかるというものだ。

「そして、さっきのシュウという女とその仲間は、その流れの元である、この時代のオタクに目を付けた。将来必ず世界の中心となる彼らを、今から自分達の好きに動かせるようにマインドコントロールを始めたんだろうと、組合では話をしている」

「……聞けば聞く程、むかついて来た。父さん、さっさと捕まえて四五年でも何年でもいいから、送り返してやってよ」

「うん、任せてくれ。と、言う事で、雪広、悪いけどシュウってのを捕まえて父さんのとこ、連れて来てくれ」

「んな！ なんて俺がつ！」

「お前テレビの取材来てるんだから、いいところ見せるチャンスじゃないか、ねえ？ 晶ちゃん、欲しいでしょ？ そういう映像」

晶の目が光る。前にみた営業スマイルが復活している。これは仕事モードに変わったという印だ。

「そりゃーもう。実は、昨日、初回の放送があつたんです。ただのユキ君の日常をまとめたものだったんですけど、番組史上最高視聴率だったんです」

溢れんばかりの笑顔だ。真紀緒は小さく拍手までしている。

呆れている俺に、父は声を落として言い出した。

「冗談はさておき」

「冗談だったのかよ」

「そういう意味じゃない。まじめな話だが、っていう意味だ。父さんは、この件で問題の四五年代表を探し出さないといけない。彼は他の時代に移動はしていないという情報だから、父さんが四五年に赴かなければならない。ここにいられないんだ」

「まじで……？ 本当に俺が探すの？」

嘘だろう。いつのまにか、本当に事件に巻き込まれている。でも、俺なんかの関わる事件に、解決なんて期待できないぞ。

「お前しかできないだろう。晶ちゃんも、真紀緒ちゃんも彼らの意思では行動できないのだから」

そうだった。行動力のありそうな晶も、知識の泉のような真紀緒も、俺の代わりにはならないのだ。

どんどん肩も背中も丸まっていく俺に、追い打ちをかけてきたのは、真紀緒だった。

「ニカ子さんは、少し休まれれば大丈夫だと思いますが、多分、御門さんは度重なるサブリミナル効果と、ガムに含まれている物質での体内汚染が、かなり深いと思われます。サブリミナルは観るのをやめれば、効果は薄れるかもしれませんが、悪質な麻薬物質に関しては、分解できる解毒物質の投与がなくては、目が冷めた後の草哉さんは、次第に苦しまれるでしょう。しかし、今のままでは、何を

与えれば快方に向かうのか知る事が出来ません。彼らに直接聞き出さなくては。草哉さんの為にも、そして、他の被害者の方の為にも、田中さん、お願いします」

「それに、市場に出回っているガムにどうやって麻薬物質を混入しているのかも突き止めないと、被害を止められない」

「と、言う訳だ。やれるな？ 雪広」

再び家へと向かい始めた車から見る太陽は、色をオレンジから紺へと変えながらゆっくり暮れていく。でも、俺の気持ちはそれとは比べ物にならない程の勢いで、下へ下へと沈んでいった。

第十話

二カ子は、自宅に着くまでの間に気がつき、体がだるいとは言っていたものの、他は問題ないということそのまま帰らせた。真紀緒が家の中まで着いていき、成り行きを簡単に説明しているはずだ。草哉のほうは、相変わらず意識のないような状態でぐったりしている。とても、このまま家に送っていく事はできないと、とりあえず俺の部屋に寝かせた。悪いとは思ったが、草哉の携帯を勝手に拝借し、母親と名のついたメールアドレスに、俺の家に今日は泊まるという内容のメールを送っておいた。幸い明日は祝日だ。これで一晩くらいなら、ご家族が心配することはないだろう。

父は、家に寄る事もなく、そのままの足で四五年に行くべくどこかに消えていった。母は何も知らず俺たちの帰りを迎え、夕飯は食べないのか、とちょっとむくれていた。

草哉を自分の布団に寝かせ、俺は仕事をする為に隣の部屋に向かった。晶を追った。

「晶さん、ちょっといいですか？」

ドアの前で中にいるだろう晶に声を掛ける。その場で返事が聞こえるのを待っていると、おもむろに扉が力チャと開いた。

「なに？」

立ち話程度なら、という晶の意味が伺えた。よほど忙しいのである。

「すみません、お仕事あるのに。一つだけ聞かせてください」

晶は黙って俺を見上げ、その続きを待っている。

「晶さんたちは、今日、あのビルの一室で何が行われていたかも、これから俺がどうなるかも、全部知っているんですか？ あのシユウという女の事は知らなかったみたいけど、一体どこまで知ってるんですか？ この事件の結末も知ってるんですか？」

晶は、目をそらさずにまっすぐ俺を見ながら、まっすぐな声で聞

いた。

「なぜ、それを知りたいのか、それを先に聞いてもいい？　その答え次第で、私もちゃんと答えるから」

その時ばかりは、彼女が年下であることは完全に忘れていた。対等である事を強調してくる晶に、俺も自分の気持ち返さなければと思った。つかの間を経て、俺は口を開いた。

「……やっぱり」

晶はだまって聞いていた。

「やっぱり、いまの質問、なかった事にしてください。ごめんなさい、忙しいのに。じゃ、おやすみなさい」

俺は踵をかえして、自分の部屋の飛び込んでいった。後ろ手に部屋の扉をしめ、大きく息吐いた。知らないうちに俺は自分の手を強く握りしめていたようだ。広げた手のひらに、爪の跡がじわじわ痛かった。

情けない。

そう思った。

この事件に巻き込まれた事実が、きっと晶達が取材に来た理由となる事件なのだろう。それならば、俺はここで何かを起こすに違いない。それが偉業なのか、愚業なのかは分からない。だから、それを先に知りたかった。俺は成功するのか、失敗するのか。聞いて安心したかったのだ。

でも、晶にさっき問いただされたとき思った。

情けないだろう。

結局俺は、頑張る事をしただけだった。結果が決まっているなら、何もしなくていいような気がしたただけだ。でも、そんなの情けないじゃないか。

自分がどんだけ人間か、分かっているつもりだ。俺が歴史に名を残せる器じゃない事くらい、自分が一番わかってる。だからこそ、こういう理由で俺を取材に来ているのか、が大事な事ではない。逆なんだ。どうせ何もできないんだ。せめて頑張ってる姿を、彼らに

見せてやらないと。俺には、それくらいしか未来の人達に見てもらえる事なんてないんだから。

こんな主役でごめん、未来の人達。でも、楽しんでくれたらいいな。へたれオタクの珍道中、くらのサブタイトルでもつけてもらって、笑えるドキュメントってことで。

「俺に何が出来るか分からないけど……」

苦しそうな表情を見せながら横たわる草哉に、俺は聞こえていないと分かっていると言っておきたかった。

「まあ、がんばるさ。お前も寝てる場合じゃないぞ」

自分でこれから言う事を考えて一人笑ってしまった。

「未来は俺たちオタクのもの、らしいぞ。信じられるか？ ウケるだろ？」

かなり気持ち悪い光景だが、俺はふふふと含み笑いをしていた。笑ってないと、自分を保っていられなかったのかも知れない。正直、周りで起きている事にどこまで自分が順応できているのか自信がなかった。

でも、紛れもなくこれが、今俺が生きている現実だ。

明くる日、午前中の早い時間に家の呼び鈴が鳴った。ちよつとの間を開けて、すぐにどどどど、と階段を上ってくる音が聞こえた。そして俺の部屋の扉がものすごい勢いで開け放たれた。

「ユキちゃん！ なに、まだ寝てるの？ 行くよ！」

俺は、草哉を自分の布団に寝かせていた為、自分はその横で座布団を枕にざこ寝していた。

「……？ 二力ちゃん？」

「もう！ 早く用意して！ あ、ごめん、御門君、いたんだね。……まだ気がつかないのか」

俺はやっと上半身を起こし、今日やるべき事を思い出した。

「そつだ。探しにいかないと。って、二力ちゃんはどこに行くの？」
肩、腕、ついでに眉毛も大げさに下げて二力子は言う。

「もう。あのシュウって子探しに行くに決まってるでしょう？
いいから！ 下で待ってるから、早く来てね！」

やかましい目覚まし時計が立ち去り、俺は草哉の様子を見た。まだ目をささないが、昨日のように苦しそうではない。とにかく、このまま寝かせておいて、俺は探しにいかなくてはならない。

本当に物語の主人公にでもなった気分だ。友達を助ける為に悪い奴を探し出すなんて、な。

そんなバカな事を俺は考えていた。

晶と真紀緒もちろんついて来てはいるが、実際探すのは俺と二カ子だ。二人はあくまで取材をするだけだ。

何の手がかりもない俺たちは、まずは昨日行った秋葉原のあの雑居ビルへ行ってみる事にした。

午前中も早い時間なので、昨日の様に人通りも多くなり、まだ街自体が寝ているような感じを受ける。

「ここですね」

「うん。六階まで行ってみる？」

「とりあえず、何か残ってるかもしれないし。行ってみましょう」
エレベーターで六階に行き、重い鉄のドアを開けてみた。鍵がかかっているかもしれない、と勘ぐっていたが、思いのほかあっさりドアは開いた。

「開いた」

「うん、入ってみよう」

「二カちゃん達は、ここで待ってて下さい」

三人は各々が、なぜ？ という顔をしている。

「一応、俺、男ですから、見てきます。何か変な奴がいたら危ないですから」

「私だけのご同行させてください。護身術も心得ておりますので」
真紀緒はもちろん、晶もうんうんと頷いている。真紀緒に付いているカメラが必要と言う事か。

「じゃあ、真紀緒さん、俺の後ろに付いて来てくださいね」

そう言って、俺は中に入ってしまった。

昨日同様、部屋のなかは真っ暗で見えづらいが、部屋の構造は知っていたので、すぐにカーテンを開け、部屋を照らし出させた。

見渡す限り、部屋の中は昨日のままだった。椅子が散らばり、奥にはホワイトボードと大画面テレビ。俺たちが出て行った時とさして変わらない様に見える。ただ、そこにいた人達だけが消えただけ。

「昨日のまんまみたいです」

「ええ。あの後、急いでここから出て行ったという感じですね」

俺と真紀緒は、乱雑に残されている広い部屋で、ただその姿を見渡していた。嫌でも、昨日の奇妙な様子を思い出してしまう。自然に顔が渋ってくる。

「ユキちゃん、見て！」

ニカ子がまだ何も言っていないうちに、部屋に入ってきていた。

「ニカちゃん、待っててって言ったのに……」

「そんなことより、これ！」

ニカ子は手にノートのような物を持って見せていた。

「それは……」

昨日、ここに入るとき、ルーフエスという男に名前を書いてくれと言われた名簿のようなものだった。

「これ、見て。昨日の日付の前にも、たくさん他の日に開かれた会の時の名簿があるの」

ページをめくりながら見せてくれた内容は、何十ページにも渡り会を開いた時の参加者名簿が続いていた。一番上の行に日付。それぞれのページには、十から時には四十を超すような数の名前が書いてある。

晶がノートを覗き込みながら言う。

「これがあれば、誰があのアニメを見てしまっって、誰がクールガムを大量に摂取してしまっているか、わかるね」

「そうですね、これはもらっていきましょ」

これで一つ手がかりと、成果を得る事が出来た。さて、どうしよう、と考え始めた時だった。

ガタツ。

「誰!？」

二カ子が声を上げる。四人それぞれが音の主を探そうと忙しく目と耳を動かしていたが、それは案外すぐ近くだった。

「あ」

昨日、シュウがにこやかに立っていた場所の、すぐ後ろ。この会場の舞台裏にあたる所であろうか。狭いスペースに机と椅子が三脚置かれていた場所にいた。

「これ、昨日の人」

床で仰向けに横たわる巨漢。ルーフエスだった。両手両足を大きく広げているのを見ると、先ほどした音はたぶん椅子が何かに体をぶつけた音が何かだろう。

見栄えの良いとはいえないその姿を見下ろす形で、真紀緒が言った。

「この様子ですと、この方も草哉さんと同じ症状のようですね」

「なんでこの人だけこんなところに置いておかれてるんだろう……」

この人は参加者じゃなくて、シュウの仲間でしょう？ 足跡を残していくようなものじゃない」

二カ子の言う事はもっともだったが、その理由を明かした晶はさらにもっともだった。

「運び出せなかったんでしょう。この重さじゃ」

「ああ……」

草哉同様、今見る限りはもう辛そうな顔は見せてはいないが、かえってそれが可哀想とも、痛々しくも見える。要は、置いていかれた訳だから。

結局、これ以上の手掛かりは他にないだろうと、その男が起きるのを待った。

「晶D、そんなにつついてはきつと痛いはずですよ」

近くにあったボールペンの先をルーフェスの左腕の柔らかさそうなところに何度も突き刺していた。

「痛い訳ないじゃない。でもね、何にも刺激を与えないままじゃ、いつまで寝てるかも分からないもの」

足を揺らしてみたり、耳元で大声を出してみたりはしているものの、やはり気づく様子はなかった。雰囲気を読んで俺は提案する。

「まだ時間も早いですし、少し待ってみましょう」

「うん、そうだね」

ニカ子も覚悟を決めたのか、側にあった椅子に座りながら言った。それを見て、晶、真紀緒と椅子に座った。俺はその場に体育座りだ。

皆が束の間、一息をつく。

ぱつと見、不思議な光景だ。太った男の横たわる周りでくつろぐ男女四人。見るでもなく、ぼんやりその巨体を眺める。

「なんか、変だね。この状況」

言ってニカ子は吹き出した。つられて笑みながら晶も言う。

「黙って静かにしてても、このデブに安眠を与えるだけだね。何か話でもしてよう」

そうですね、と真紀緒は頷いてから言う。

「シュウと言う方は、一体どんな方なのでしょうね。お若い方のお見受けしましたが、なぜあんな大胆な事をしようとしたのです」

見た感じでは十代、あるいはせいぜい二十代前半か。晶や真紀緒がこの歳で働いているのだから、シュウと言う子も若いからといって、知恵も身もない暴走だと言い切ることもできないのだが。

「二〇四五年と言えば、ちょうどLOPが世界的に導入された年ではなかったでしょうか」

「オタクが作った生活オペレーションシステム、ですっけ？」
俺は真紀緒に聞いた。

「はい。シュウさんと関係があるかは分かりませんが、確かその年

だったかと思います。大変な話題になったと本で読んだ事がありますよ。私たちの年代でも、L O P がもしなかったら、どうやって生活したらいいのか、という人が殆どです」

「具体的に、どんな事ができるんですか？」

それを聞いた途端、真紀緒は晶を振り向き、判断をあおる様に見つめている。何か悪い事でも聞いたのだろうか。

「どうしたんです？」

父が昨日、この件の情報開示の許可を取って来たと言っていたから、聞いてはいけない事もあまりないと思っていたのだが。

代わりに晶が答える。しかしなんだか、言いにくそうにしているのが分かる。

「うーん、えーっとね、なんて言うの？ 毎日の生活が楽になる、って言うの？ 人間とコンピューターの共存って言うの？」

俺は見かねて言った。

「晶さん、いいですよ、無理しなくて。言っちゃまずそうな事なんでしょ？ 無理矢理聞き出そうなんて思ってませんから」

晶は自分の頬を人差し指でポリポリと書きながら、えへへと言っている。

二カ子が話を変えようとしたのか、口を割った。

「ねえ？ 私ちよつと不思議に思っていたんだけど、聞いてもいいかな」

晶と真紀緒に向けて、二カ子は椅子の上で座り直した。

「晶ちゃんに、真紀緒ちゃん。それに昨日のシユウ。全員女の子なのに、名前がみんな男の子みたいな気がするんだけど、どうして？」

言われて初めて気づく。確かにそうかもしれない。たまたま、と言えはそれまでかもしれないが、何か理由があるとすれば聞いてみたい。

そう言う事に詳しそうな真紀緒が、やはり答えた。

「一度、私も調べた事があるんです。実は、いまのこの時代からの流れなんですって。この時代あたりから、自分の子供につける名前

を、出来るだけ平凡でなく、少し変わった名前をつけようとする傾向が強まっているようです。特に女の子には、それ以前のスタンダードだった何何子、と言う名前が激減します」

「ああ、確かに。私のクラスにも、子が付くのは四人しかいなかった。それに漢字もすごく難しかったり、外国人の名前みたいだったり、確かに凝った名前が多いね。まあ、私は子が付いてても、変わった名前ではあると思うけど」

晶が元気に言う。

「私、二カ子ちゃんの名前大好き。すごくいい名前だね、元気づけて、二カ子ちゃんにぴったりだと思うよ?」

きつと本心から言っているのだろう。お世辞なんていうものは晶には似合わない。

「ありがとう、晶ちゃん。真紀緒ちゃん、それで?」

「ええ。その傾向がどんどん強まって、二〇三〇年くらいから、より変わった名前をつけるのが流行したんです。それで、今の私たちのように、女の子にまるで男の子のような名前をつけるのがブームになったようですね」

「へえ。おもしろい。じゃあ、将来私が女の子をもし産んだら、男の子みたいな名前つけようかな。太郎、とか? 先取り、なんちゃってね」

あははは。

みんなで笑っていた。晶、真紀緒、二カ子、俺、あれ? もう一人の声?

「はっははは、太郎って、それはないでしょ、太郎って……あ」

「あ、じゃないよ」

「あ……じゃないですよ……」

ルーフェスがやっと起きていた。

第十一話

ルーフェスは、シユウと一緒に四五年から来たと告白した。まだオタク全盛期ではない時代の中にも関わらず、ルーフェスはかなりのアイドルオタク、アニメオタクで、シユウのコスプレライブ等に通いつめるうちに、使いつ走りにされる様になっていたという。今回の計画も全て、シユウが考えた物だと言うのだ。

「だからといって、あんたに責任がないと言う訳じゃないのよ？」

共犯って意味わかる？ 共犯。首謀者でないっていうだけじゃない」
きつく晶にいわれ首を垂れ下げているが、目だけはちゃっかり晶を見ている。

「あんた、なんでちよつと笑ってんのよ！？ 立場わかってんの？」

「いやー。どつからどう見ても、萌えキャラですよー？ 萌えー！」

ねえ？ 田中さん？」

「俺に同意を求めるな！」

筋金入りのオタクだと自負する彼にとっては、どんな局面であろうと、萌えられるキャラには目がなくなるのだろう。

晶は、顔全体で嫌悪感を現しながら、後ずさりする。

その後、残りのあきれ顔の三人に散々絞られ、ガムに仕込まれた脳内麻薬物質の成分と、それを混入している製菓工場、もちろんシユウの隠れていそうな場所も全て吐き出させた。

ルーフェスから聞き出した脳内物質の解毒剤は、真紀緒が調べたところ、ある健康ドリンクにその解毒成分がたまたま多く含まれている事がわかり、それを飲ませれば体内に多くなりすぎた物質は自然に減っていくと言う事だ。早速、家にいる母親に理由を適当に作って話し、家で寝ている草哉に無理矢理にでも飲ませるように伝えた。

そして工場には消費者の振りをして電話をし、ガムに変なものが混入されていた、と工場自身での改善を促した。直接その場に行っ

てなんとかしたいところだが、工場までの距離が電車でも三時間以上かかってしまう現状では、苦肉の策であった。

「よし、とりあえず、周りは固めましたね。あとは、シュウのところ。行きましょう」

「うん、この人どうする？」

俺と二カ子はずつむいて床に座っている体の大きな男を見ていた。「僕は大丈夫ですよ。このまま放っておいてください。どうせ体が動きませんから」

「放っておいてって言っても……」

こんな裏通りの雑居ビルの一室。人の出入りがあるとは思えないし、まだ動けそうにないが、この男一人で置いく訳にはいかない。逃げるとも限らないし、シュウに何かしらの連絡を取る事も考えられる。

「じゃあ、私が残るよ」

晶が言う。

「そんな、晶ちゃんだけここに、しかもこの人と一緒にだなんて、残して行けないよ」

二カ子は心配して言ったが、晶は首を振る。

「ユキ君も二カ子ちゃんも、早く追いかけないと。自分たちで動けない私達のどつちかが残るべきだもの。真紀緒はカメラもあるし、ここに残るなら私が適任。背もちっちゃいから、足も遅いしね」

「晶D……」

「さすがに、この人も連れてみんなで、っていうのもきついしですしね……」

俺には、いい案は見つからない。どうしよう、と考えていると、真紀緒が口を開く。

「二カ子さん、耳にピアスは開けてらっしゃいますか？」

「え……？ ピアス？ うん、片耳に一カ所ずつ開いてるけど、なんで？」

それをきいた真紀緒は、自分のつけていた小さなピアスはずし、

二カ子に渡した。

「本当なら、撮影の為私も同行しろ、と晶Dから言われる所ですが、ここは私も一緒に残ります。万が一他の仲間が現れでもしたら大変です。ミイラ取りがミイラになりかねません。ですから、二カ子さんに、そのカメラを託したいのです。お願いできますか？」

晶は驚いて話に割って入った。

「大丈夫だつてば、真紀緒！ 一人でもだいじょう……」

「わかった。真紀緒ちゃん。晶ちゃんも、ここをお願いね」

晶の話を遮る様にして、二カ子はそう言い、ピアスをそれぞれの耳につけた。

「気をつけて。二カ子さん、よろしくお願いします」

「オッケー、任せて。いい映像が撮れる様に祈ってて。行こう、ユキちゃん」

「うん」

後ろでは、まだこの決定に文句のある晶が騒いでいたが、俺と二カ子はその場から急いで出て行った。

シウウの隠れているのは、その雑居ビルから歩いて二十分程度の距離にある、週間賃貸の出来るマンションしかないだろうということだった。

「この距離なら、走るのが一番早いね」

大体駅一つ分の距離。下手に駅やバス停を探すよりきつとその方が早いだろう。

「そうしよう」

体力に自信のない俺と、普段から部活で鍛えている二カ子の二人は、一斉に走り出す。いつシウウが俺たちの動きに気づいて、また逃げ出すかも分からない。とにかく急ぎたかった。

あまり土地勘のない場所だけに、通りの看板や電柱の標識を確認しながら進んでいった。

五分もすれば、俺は息が上がってくる。しかし、疲れたから休憩と言える訳もない。ただひたすらに黙々と、町中を走る。前に行く

二カ子は、時折振り向きながら、何も言わずにペースを合わせてく
れていた。

二カ子が声を掛ける。

「大丈夫？ はあ、はあ。ユキちゃん、少し休む？」

俺は、からからの喉をなんとか開けて返事をする。

「だ、はあ、はあ、大丈夫、いこう、はあ、はあ、はあ」

そう、と言つて俺の横で明らかにペースを落としながら、二カ子
は話します。

「私、ちよつとこつというの懂れてた、はあ、はあ」

「え？」

何を突然言い出すのか、と思つたが、二カ子は構わず続けた。

「私、はあ。少年漫画好きだつて言つたでしょ？ はあ、はあ。な
んでかつて言つと、少年漫画はね、なんでもがむしやらなの」

どういう事？ と聞きたかつたが、とても声にならなかつた。口
から出るのは、体から吐き出される大量の二酸化炭素ばかりで、俺
は黙つて聞くしかなかった。

「大切な物を守る為、仲間と戦う為、自分のプライドを守る為、な
んでもがむしやら、はあ、はあ。でしょう？」

確かにそうかもしれない。少年漫画は、どのジャンルの漫画より
も、がむしやらという事に関しては負けないだろう。それが良い所
だし、少年に読まれるべきもの、という位置づけなのだから当然と
も言える。しかし、その何に懂れるというのか。

「子供から大人になるに従つて、すこしずつ、がむしやらに何かを
する事つて、なくなつていく気がするの、はあ。はあ、がむしやら
つて、何か一つの為に後先考えないで、ただ一生懸命突き進むつて
ことでしょ？」

俺は首だけで、うん、と答える。

「そういう世界が、私、はあ、大好きなの。私も、何かの為にがむ
しやらになりたいつて、ずつと思つてた、漫画みたいに。変かな、
こんなの」

「そんな、こと、はあはあ、ないよ」

二カ子は、笑った。額にうつすら汗をかいていて、それが太陽の光にキラキラと反射していた。俺は、その清潔感のある横顔に、どきっとした。

「ユキちゃんが、むかし、私に貸してくれた漫画、あれを読んでから、私、漫画が好きになったの、はあ、はあ。ユキちゃんのお陰」
はあ、はあ、とリズムを刻みながら息をする二カ子は、俺を横目で見て言った。

「私も、実はオタクでしょ？」

そう言って、二カ子は笑う。俺には、なんで二カ子がこんな話をしたのかが、わかった。幼なじみ故か。

俺が、自身をオタクだと卑下している事を知っていたのだろう。それが理由で、俺が二カ子にずっと近づけなかった事も。そして、そんな必要はないのだ、と遠回しに言ってくれているのだ。

「二カちゃん、はあ。はあ。」

もうしゃべれない、でも、これだけは言わないと。

「ん？」

「……ありがとう」

俺の体力は、既に限界を突破していた。なのに、自然に笑顔になっていた。

ルーフエスから聞き出したマンションに到着した。俺の息は上がりっぱなしでうるさいだけなので、まずは来客のふりをして、二カ子が外から様子を伺う事になった。その間休んでくれ、という事なので、俺は大人しくマンション前の道を挟んだ向かいの塀に、背中を付けて座り込んでいた。

二カ子が、マンションのエントランスに入っていった。一階の一番奥の部屋らしい。エントランスを抜けると、玄関が横並びになっていて、一番奥の玄関は、丁度俺のいるところから見える低い塀を隔てて見える場所にあった。

二カ子がその玄関の前を、ウロウロしている。その様子が、どこからどう見ても怪しすぎて、俺は吹き出した。

と、吹き出している場合じゃなかった。

俺の目の前に一台のタクシーが停まった。まさか、とゆっくり上を覗いてみると、まさに、その乗客はシュウだった。昨日のフリフリとは全く正反対な、黒いパンツスーツを着ていて、昨日が十六歳なら、今日は二十四歳というくらい、大变身していた。座っていたせいか、タクシーの中のシュウには、俺がここにいる事はバレていないようだ。ボタン、という音と共に車は動き去り、俺は急いでエントランスへと向かった。しかし、そこにシュウの姿はもうなく、玄関前の廊下で、二カ子と、シュウが鉢合わせしたところだった。

「おかえりなさい」

二カ子は、意外に肝が据わっているようだ。

シュウはその瞬間に二カ子の事を思い出したのか、踵を返して走り出した。

「ちよつと、待ちなさいよっ！」

追いかける二カ子から逃げ出すシュウも、俺の顔を見た途端、足を止め観念の表情を見せた。

俺と二カ子はシュウの部屋に上がり込み、話を聞くことにした。聞きたい事は山ほどあるのだ。

第十二話

ワンルールのその部屋は、最低限の家具や電化製品は備え付けのものらしく、なんでもとりあえずは揃っているのだが、散らかっているでもなく、まったく生活感のない部屋だった。まるで、モデルルームに来たみたいだった。

「ルーフェスが、ここを……？」

シュウは綺麗にカバーのかかったベッドの端に座って、不機嫌そうな表情で言った。

「その通り。彼もかなり弱ってたわ、あのビルの六階で」

「だって！」

突然シュウは大きな声を上げる。そしてすぐに、その自分の声に驚いたかのように、小声で続けた。

「だって、連れて行くこうにも、あんなに大きいんじゃない、とても運べないもの。見つかり辛い所まで動かすので精一杯だったのよ」

少しでも連れて行くとした気持ちがあったのなら、ほっとした。なんとも思っていなかった、などと聞くよりはずっといい。

「シュウさん。俺の父は、この年代の時空移動の代表をしています。だから、あなたとルーフェスさんには、帰ってもらう様に引き渡すつもりです」

シュウはこちらを一切見ずに、吐き捨てる。

「分かってるわ。その為に来たんでしょう。とっとと連れて行くならしたらいいじゃない」

俺は一つため息をついてから、続けた。

「シュウさん。そのまえに教えてください。なぜ、あなたはこの時代にきて、オタクと呼ばれる人達をマインドコントロールしようとなんてしたんですか？」

俺と二力子は、部屋の壁沿いに立ちながら、シュウの答えを待った。

「マインドコントロール……。そうね、そうかも知れない。でも、私は、彼らを解放しにきたのよ！ 彼らに危害を加えるつもりも、自分の利益に使おうとした訳でもないわ！」

「え？」

俺も二カ子もその話を聞いて驚いた。俺たちは勝手に、シウウがこの時代のオタク達を操り、自分の時代をより有利に運ぶ為の作戦なのだと思っていたが、そうではないと言うのか。

「オタクの解放、って、一体どういう意味？ あなたの目的は？」

二カ子が問う。

シウウは、口をつむった。正直俺たちに言う必要はないのかも知れないが、実際その被害を受けた二カ子は、なおさら気になるのかもしれなかった。

「言えないってことは、やっぱり正当な理由もなく、自我の欲の為にしたことだって認めてるってことじゃない。違う？」

シウウは下唇を噛んで、悔しそうな表情をしている。しかし、少しの間を経て、話さなければ話は進まないと思ったのか、ゆっくり語りだした。

「私は、二〇四五年から来たの、知ってるわよね。私、そこでコスプレアイドルやってるの、そう、オタクよ、私も」

二カ子が窓際にあつたソファアに腰を掛けた。俺はそのまま立つたままで、玄関の脇にいた。

「最近聞いたのよ、将来、オタクって言えばちやほやされる時代がくるって。このまま、この世界で頑張ってたら、良い思い出来るからって。その人は、私を応援するつもりで教えてくれたんだと思う。私もはじめは、嬉しかった。だって、まだ私の時代は、オタクはマインナーで、そうじゃない人達には気持ち悪いって言われる事を覚悟しないとやっていけない時代。隠れて隠れて、馬鹿にされても、自分の好きな事を、分かる人たちだけで楽しむ、暗い世界。でも、それが将来は、みんなが憧れる世界に変わってるだなんて！ ひどいわよ！」

ミシツという音がして、ベッドを見ると、シュウの置いた手が、ベッドのカバーをきつく捕まえていた。そんなシュウを見て、二力子は言った。

「嬉しいことだったんじゃないの……？ なにが、ひどい、なの？」
「変わったのよ。オタが日の目を見る事は可能だったのよ。それは未来が証明してくれた。なのに、この時代の人達は、変えようとしなかった。オタクである事をひた隠して、大好きな趣味も誰にも言えず、それでも構わないって、この時代の人達が思わなかったら、もっと自分達のする事に自信をもっていてくれたら！ もっと、オタクの将来を考えてくれていたら、もっと早くに変わったはずなのに！ 私もそういう時代に産まれたかった。未来の、オタクが憧れの存在でいられる時代に産まれたかった。でも、自分の産まれる時代を選ぶ事は出来ないじゃない！ だから、過去を変えに来たの。もっとたくさんのおタクが、明るく生きられるように」

シュウは泣いていた。その意味は俺には分からないが、たぶん彼女の時代にはその時代なりの事情がって、それはオタクには厳しい環境なのだろう。しかし、未来にくるはずのおタク優遇期を知り、喜ぶより前に、ならば自分の時代も変えられるはずだ、と過去からリセットを試みたのだ。

「あなたにはあなたの思いや、使命感があるってことはわかった。でも、あなた、ただ甘えてるだけじゃない？」

二力子は強い口調できっぱり言った。シュウは顔を上げる。

「私が、甘えてるですって？」

「だって、そうじゃない。未来を知って、オタクの存在意義を変えられると知ったあなたは、ならばもっと前からそんな時代だったらよかったのに、と思ったんでしょう？ 自分の生きる時代が、既にオタクとして住みやすい時代になっていて欲しかったって思ったんでしょう？」

「そうよ、それが何が甘えなの？ 苦しむ時代を少しでもなくして、より多くの人達が、オタクであるからって日陰にいる日々を送らな

くて済む事になるのよ。だから……」

「だったら！　なぜ、あなたは過去の人を動かすの？　なぜ、あなたは自分の時代で、自分の力で、あなたの生きるその時代を変えようとしなかったの？　過去を変える方が、自分の力で一から変えるより楽だからじゃない？　自分で今を変えるよりも、楽だからじゃないの？」

シュウは黙り込む。

「自分の時代にもどったら、そこでやって見なさいよ。どれだけ未来を早められるか。あなたの望む時代を、待ってるんじゃないのかみ取ってみなさいよ！」

「あんたに言われなくなつて……。ここで失敗したんだもの。それしかないでしょう。まったく、オタクでもないやつにオタク道を語られたくないわ！」

今度は二カ子が、ぐつとこらえた。

「さあ、もういいでしょ。どこへでも連れて行ってよ」

「待ちなさいよ」

「何？　まだあるの？」

「あなたがした事は悪い事だし、どんな高尚な志を持っていたとしても、過去を変えるなんて外道だと思う」

「もう分かったから、よしてよ。これから管理組合にも、こつてり絞られるんだから、こんなところでこれ以上お小言言われたくないわ」

「あ、あの、まあ落ち着いて……」

「最後、よ」

二カ子は、シュウを睨むように見据えていた。

「あなたのコスプレ、かわいかった」

殴り掛かるのではないか、と心配になるほど張りつめた空気だった。

その後に続いた、シュウの言葉も意外なものだった。

「……ありがとう」

二カ子は、こういう子だった。昔から。

「じゃ、行こうか、ユキちゃん」

「あ、ああ、はい」

人の良いところも、悪いところも、ちゃんと見つけてちゃんと教えて上げられる、そんな幼馴染を、ちよつと自慢に思った。

徒歩ではじめの雑居ビルまでもどり、総勢六人の不思議な集団は、父の帰りを待つ為に、我が家へ向かった。

母は、大人数の俺たちを見て、はじめは驚いたが、全員を喜んで迎え入れた。大人数で迎えた夕食は、母がノリノリでごちそうを振る舞ったということは言うまでもない。

第十三話

その日の夜遅く、父が相変わらず予告なく帰って来た。実際家の敷居をまたぐのは一週間ぶりだ。

父の向かった二〇四五年でも、あちらの代表は見つかったらしく、それ相応の罰を受けるらしいが、免許を剥奪されるだけで、人道的罰則などはないだろうと言っていた。

俺の部屋に集まっていた五人は、父の姿を見て口をみな閉じた。

「なんだ、俺がきたら一斉にしかけた面見せるのか？ ひどいなあ。俺はえんま様じゃないんだぞ？」

小さく笑いが起きた。

「父さん、この二人、自分達で投降して来たって事に……って、無理だよな、ごめん」

自分でも、馬鹿な事を言ったと反省した。父にそんな力があるかないかの前に、罪を憎んで人を憎まずっていう言葉通り、人は憎んでないけど、ちゃんと罪は憎まないといけない。

父は、俺の頭をポンと撫で、その手をシュウとルーフェスの肩に、やさしく置いた。

「行こうか」

その後を二人が続いて出て行く。なんとかサスペンス劇場のエンディングだったら、きっと今泣かせるバードがバックに流れていそうな場面だ。

二カ子が勢い良く立ち上がる。

「シュウ、またね」

シュウは驚いた様に足を止め、ゆっくり振り向いた。しかし、それっきり、またすぐに前を向いて歩き出した。

そして、シュウとルーフェスの二人は、未来へと帰る道に戻っていった。

「おつかれさまでした、田中さん、二カ子さん」

「無事に終わってよかったね」

晶も真紀緒もほっとした表情でこちらに笑顔をみせる。

「後は、御門君だけだ。しっかし、よく寝るねー」

昼間に母から健康ドリンクを受け取って飲んだらしいので、もう深刻な状態ではないはずだ。なのに、まだ、ずっとこの部屋の布団で寝ている。たった今のプチ感動シーン中も、実はど真ん中でグウグウと寝息を立てていた。

「昨日からずっと寝たままだね、草哉君」

晶は呆れるというよりも、感心した面持ちで言った。

「幸せそうだな……」

俺の言った言葉に、みんな暖かい笑顔で頷いていた。

夜中に起きだした草哉を送り出したのが、確か深夜二時。何が起きたのかも全く知らず、雑居ビルにいたはずなのに、なぜこんなところに？ と騒ぎ立てる草哉の頭を一発はたき、とにかく家に帰れ、とタクシーに乗らせてからまだ三時間。今は朝五時だ。

疲れ果てて寝ていた俺を、こんな時間に揺すり起こしたのは、もちろん晶と真紀緒だった。

「どうしたんです……。こんな朝早くに。話なら、後にしてくださいよ……」

枕元に置いてあった目覚まし時計で時間を確認した俺は、少々ぶっくらぼくに言った。

「ユキ君！ 時間がないんだってば！」

何か約束でもしていただろうか。動かない頭は、まだ充電不足だ。

「時間？ なんの時間？」

「私たち、そろそろお暇させて頂こうと、ご挨拶にありがとうございました」
俺は飛び起きる。

「おいとま？ 帰るって事ですか？」

布団の横に珍しく正座をする晶と、いつもの様に正座をする真紀緒は、二人揃って人差し指を口にあて、しー！ としていた。

「お母様が起きてしまわれますよ」

「そうだ、まだ五時か。」

「帰るの？」

俺はまずそれを聞いた。

「うん。一週間、お世話になりました、ユキ君」

「なんでまたそんな突然。いつ決まったんです？」

「残念そうに悲しい顔をしている真紀緒がいる。」

「局から、先ほど連絡が。昨日までの映像で、今回の分は十分という判断がされたので、早速帰ってこい、と」

「そんな、急に……」

俺は二人を送る言葉も考えられず、落ち着かないままパジャマ姿で、ただウロウロと部屋の中を歩いていた。

「おばさんには、急に飛行機が取れて、スイスに帰る事になったって書き置きしてあるから、うまく話し合わせといて」

「母も悲しがるだろう。きっと二力子はそれ以上にショックを受けるかもしれない。でも、その前に、俺が……」

「寂しいです……、二人がいなくなると」

「柄にもなく、しみりとした事を言ってしまった。でも、本心だった。」

「ありがとう、ユキ君。そう言ってもらえると嬉しいよ」

「ええ。色々ご迷惑をかけましたから。でも、私たちも寂しいです」

「俺はずつと言おうか、言うまいか迷っていた事をここで口にした。一つだけお願いがあるんだけど」

第十四話

俺は、授業をそっちのけで手紙を読んでいた。

ついこの間までの俺を取り巻いていた環境は、もしかしたら夢だったのではないかと、度々思う。しかし、紛れもなく、あれは現実だった。

晶と真紀緒が旅立ったその日、二カ子にその事を告げると二度と合う事の出来ないという、空虚感に涙を流していた。それ以降、二カ子は、休み時間などに暇があれば、あの時さー、と思い出話をし、記憶をとどめておこうとしているようだった。俺にとっては、その二カ子の行為が、あの不思議な一週間は現実だったのだと思わせてくれている。

俺は、鞆の中に入れてあるDVDを思い出す。最後の日、俺が晶達にお願いした物だ。

わがままを言わせてもらった。どうしても、二〇八五年に放送される俺の番組を見たい、と頼んだのだ。本来ならもちろん不可能なのであるが、たまたま、いやこれも必然なのか、父の立場を利用して、いつになってもいいから、父に渡しておいてくれ、と頼んだのだった。そして、今日の朝、中国の消印が押されたエメールが、父から届いていたのを自宅のポストで見つけ、学校に持って来たのだ。DVDはもちろんまだ見ていないが、先に同封されていた手紙だけ読み始めた。

印字されたもので、字体はわからないが、文面からして晶だろう。そこには、俺の番組は二週に渡って放送され、一週目は、あのワンボックスで聞いた様に、高視聴率だったと書いてある。しかし二週目は、更にそれを超えるもので、俺の名が改めて有名になったと言う。どんな編集がされているのか、楽しみ、と言う所だ。お陰で、上司からも誉められた、と書いてある。それはよかった。

そして、手紙の最後には、「まだ答えてなかったけれど」と繋い

だ文章が綴られていた。

「まだ答えてなかったけれど、あの日、ユキ君が私に聞いた質問。私たちは、何が起るのか全部知っているのか、と言う事。もし、あのときの私の質問に、ユキ君が「先に結果を知りたいから」と言っていたら、私は決してユキ君にこの話をする事はなかったと思います。でも、あのとき、ユキ君は踏ん張ったもんね。答えですが、私たちは、過去に起こった大きな事件は歴史として知ってはいますが、取材をする相手に起こる、日々の小さな出来事や変化までは、調べていきません。だから、私たちも何も知りませんでした。でも、分かっていた事があります。それは、ユキ君が、きつと私たちを笑顔でこちらに返してくれるだろう、ということ。楽しい時間を、どうもありがとうございます。どうぞ、次に会う日まで、お元気で。」

追伸、このDVD、これからの人生のネタバレあり、注意！」

俺は死ぬまでこのDVDを見る事はなかった。

でも、そのDVDの内容は、後に知ることになる。

そして、俺が九三歳でゲストに迎えられた、歴史ドキュメント「田中雪広の軌跡（LOPの生みの親の青年期）」で、妻の二力子とともに、まさか晶と真紀緒にもう一度会えるとは、もちろん、今の俺は知る由もないのだけれど。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6797c/>

CoolGum クールガム

2010年10月8日13時48分発行